

京都府埋蔵文化財情報

第 73 号

平安京跡右京一条三坊九・十町の調査	-----	村田 和弘	-- 1
八幡市内里八丁遺跡の道路状遺構	-----	森下 衛	-- 9
奈良・平安時代における乙訓地域の交通路 —西国街道の成立とその変遷—	-----	岩松 保	-- 17
平成11年度発掘調査略報	-----		25
31. 墓ノ谷古墳群第2次		32. 長岡京跡右京第635次(7ANKNZ-10)	
資料紹介 浅後谷南遺跡出土の滑石製刀子	-----	石崎 善久	-- 28
研修だより 石塞山滇国墓地のクラスター分析	-----	河野 一隆	-- 30
府内遺跡紹介 85. 下司古墳群	-----		34
長岡京跡調査だより・70	-----		36
センターの動向	-----		38
受贈図書一覧	-----		40

1999年9月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

へいあんきょうあとうきょういちじょうさんぼうきゅう じゅっちょう
 平安京跡右京一条三坊九・十町の調査

村田和弘

1. はじめに

今回の調査地は、京都市北区大將軍坂田町29番地に所在する(第1図)。平安京の条坊では、右京一条三坊九町の南西部と十町の北西部に該当する(第2図)。発掘調査は、府立山城高等学校の校舎改築に先立ち、建設予定地であるグラウンド内で発掘調査を実施した。調査面積は、約2,700㎡である。高校敷地内では、昭和54(1979)年度の発掘調査において、平安時代前期の大規模な邸宅遺構(府史跡として保存)などが検出されるなど注目されている。

今回の調査は、京都府教育委員会の依頼を受けて、平成10年度(第8次調査)は平成10年10月7日～平成11年3月12日の期間、平成11年度(第9次調査)は平成11年4月19日～平成11年8月30日の期間で発掘調査を実施した。

2. 調査概要

検出した遺構を九町、鷹司小路関連の遺構、および十町に分けて報告する(第3図)。

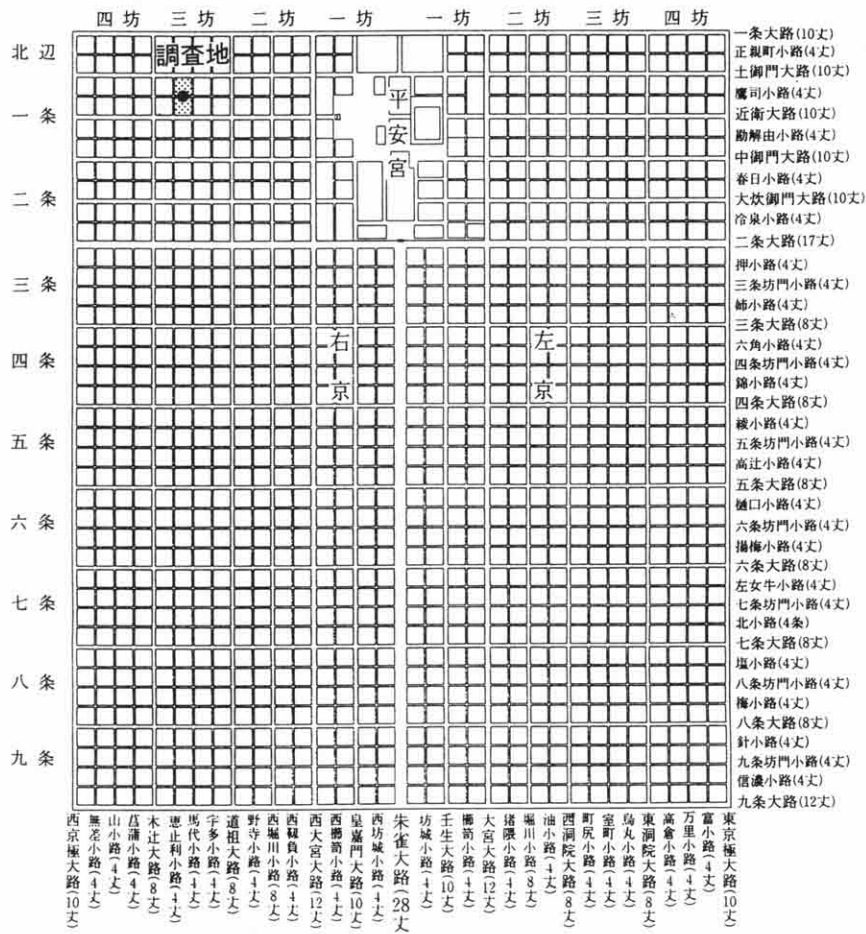
(1)九町の遺構

門跡S B 9901 桁行1間(約4.5m=15尺)、梁間2間(約3.6m=12尺)の四脚門と考えられる。柱穴は、本柱の柱穴2基と控柱の柱穴4基で構成される。柱掘形は、一辺約1~1.5mの方形である。四脚門は、都城内の宅地での門の検出は数少なく、平安京内では四脚門の全体を検出したのは今回が初めてである。検出した四脚門は、柱穴の規模や切り合っている土坑S K 99065の出土遺物などから、邸宅の時期と同じ平安時代前期(9世紀初め)のものと考えられる。また、北側にある邸宅の中心建物の中軸南延長線上にあり、九町の南端に位置する。これらの位置関係から昭和54年度の発掘調査で確認された、邸宅遺構に付随する南門であると考えられる。

溝S D 99064 門跡S B 9901の東側にある幅約2mの溝である。九町を囲う築地の内側溝の位置にあたり、9世紀初めの遺物が出土している。



第1図 調査地位置図(1/25,000)



第2図 調査地条坊位置図((財)古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』1994年より一部加筆)

埋土からは、9世紀初めに属する多量の土器片・瓦片が出土している(第8・9図)。

これら溝 S D 99010・99064、土坑 S K 99065・99066、および S K 99019・99085などの遺構は、東西方向に一直線に並び、かつ築地の内側溝の位置にあたることから、解体時に建築部材を投棄するため、溝を掘り下げた遺構と考えられる。

(2)鷹司小路関連遺構

溝 S D 98026 東西方向の溝で、平安京の条坊では九町域の南限に位置する。この溝が、鷹司小路の北側溝に相当するかは現段階では不明である。

溝 S D 99070 幅約2.5m・深さ約0.4mである。この溝は、築地の南側の溝で鷹司小路の北側溝に当たると思われる。溝は、門南東の柱穴までおよんでいるため、邸宅の解体時に幅が広がったと考えられる。溝からは、9世紀前半の土器や瓦、砥石などが出土した。

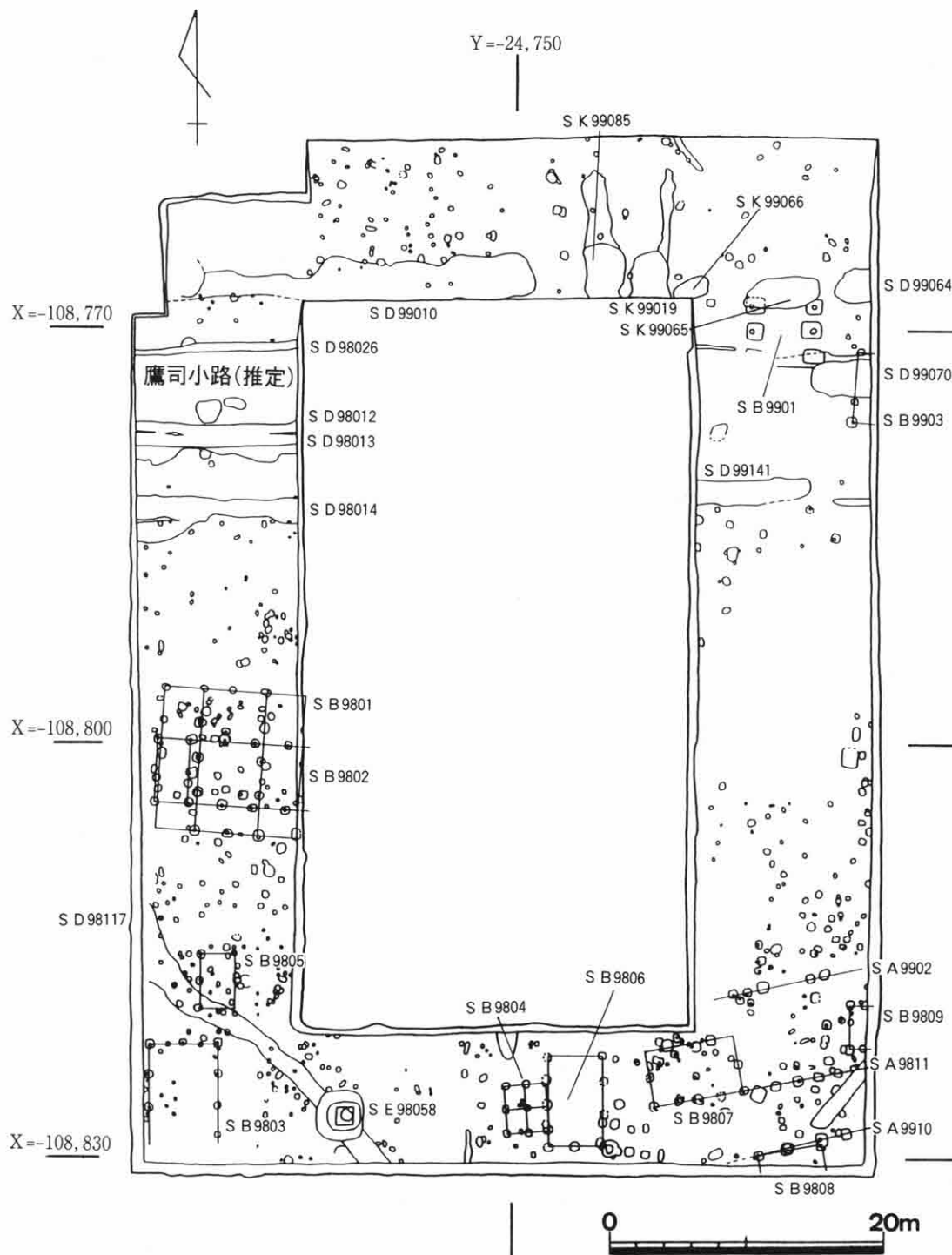
溝 S D 98012・98013 2条の東西溝が重なって検出した。時期差はあると思われるが、新旧については、上からの攪乱によって破壊されており、確認することができなかった。位置的には鷹司小路の南側溝と考えられる。

鷹司小路 門の位置と東西方向の溝との位置関係から、溝 S D 98026と溝 S D 98012・98013の

土坑 S K 99065 門の北側柱穴を一部破壊して掘り込まれている。埋土からは、難波宮式の軒丸瓦や灰釉陶器皿などが出土した(第8・9図)。

土坑 S K 99066 門の西側にあり、溝 S D 99064と同様に築地の内側の溝の位置にあたる。

溝 S D 99010 門跡の西側に位置する幅約3m・深さ約0.4mの東西溝である。この溝も、築地の内側溝の位置にあたる。

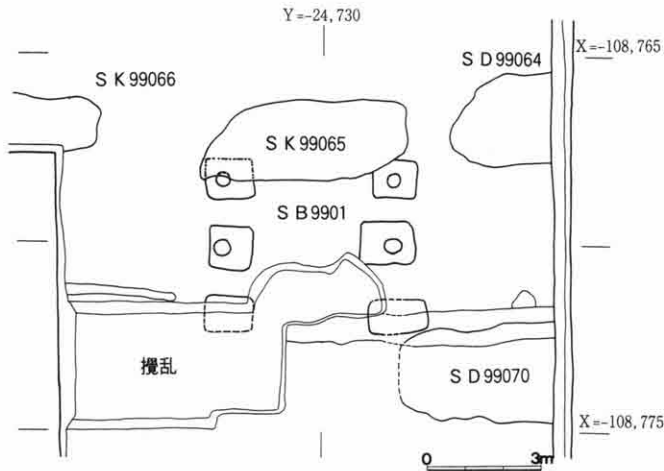


第3図 調査地遺構配置図

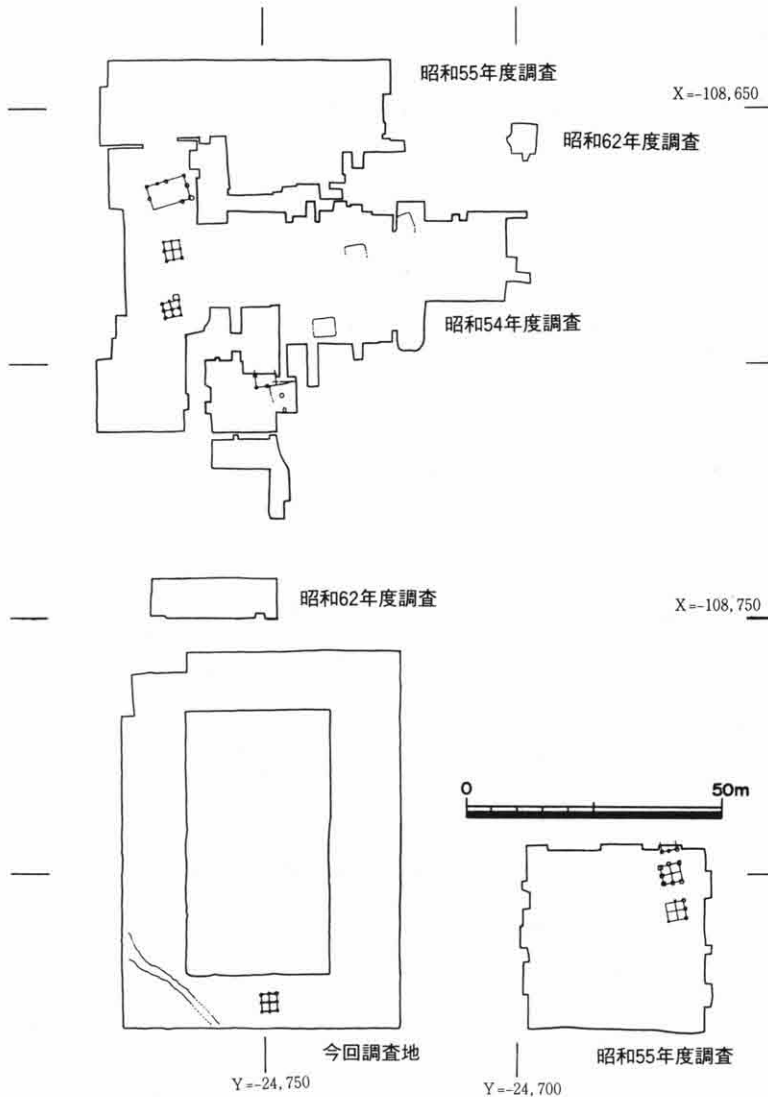
間(約6.5m)が鷹司小路の道幅と考えられる。しかし、路面を確認していないため、不確定である。
 掘立柱建物跡 S B 9903 溝 S D 99070の埋没後に建てられている。条坊の方向とは一致しない。

③十町の遺構

溝 S D 98014 幅約2mを測る溝である。埋土からは、9世紀前期の須恵器・土師器・緑釉陶



第4図 門跡S B 9901平面実測図



第5図 I期の九・十町の遺構(1/1,000)

器などの土器や軒丸瓦・軒平瓦などの瓦が出土した(第8図)。

溝 S D 99141 幅約1.5mの東西溝で、西側の溝 S D 98014につながる溝と思われる。

これらの溝は、十町域北側の築地の内側溝の位置にあたる。

掘立柱建物跡 S B 9801 2×4間の南北棟の建物である。西側と東側に廂が付く。掘立柱建物跡 S B 9801と重複しているが切合関係がなく、新旧関係は現時点では不明である。建物方向は条坊の方向と一致しない。

掘立柱建物跡 S B 9802 2×4間以上の東西棟の掘立柱建物跡で、西側に廂が付く。建物は東側の調査区外にのびている。この建物も、条坊の方向とは一致しない。

掘立柱建物跡 S B 9803 2×4間以上の南北棟の建物である。建物の南側は、攪乱により破壊されており、規模は不明である。建物方向は、真北を向っているが小規模なものである。

掘立柱建物跡 S B 9804 2×2間の建物で、総柱であったと思われる。

掘立柱建物跡 S B 9805 1×2間の南北棟の建物で、方向は S B 9803と一致する。

掘立柱建物跡 S B 9806 2×3間の南北棟の建物で、真北に向いている。

掘立柱建物跡 S B 9807 2 × 4 間の東西棟の建物である。

掘立柱建物跡 S B 9808 南北棟の建物の一部を検出した。

掘立柱建物跡 S B 9809 東西棟の建物で、西側の一部を検出した。方位は条坊と一致する。

井戸 S E 98058 一辺約3.6mの隅丸方形の掘形を伴う井籠組の井戸である。井戸側は4段分が残っていた。井戸の深さは、遺構面から約3mであった。出土遺物としては、9世紀末～10世紀初めに属する土器類・瓦類が多く出土しており、『福』の逆字が刻印された平瓦も出土した。木製品では曲物や箸・櫛なども出土した(第8・9図)。

溝 S D 98117 幅約1.7m・深さ約0.6mの溝で、8世紀の多量の遺物が出土した(第8図)。

3. 遺構の時期区分

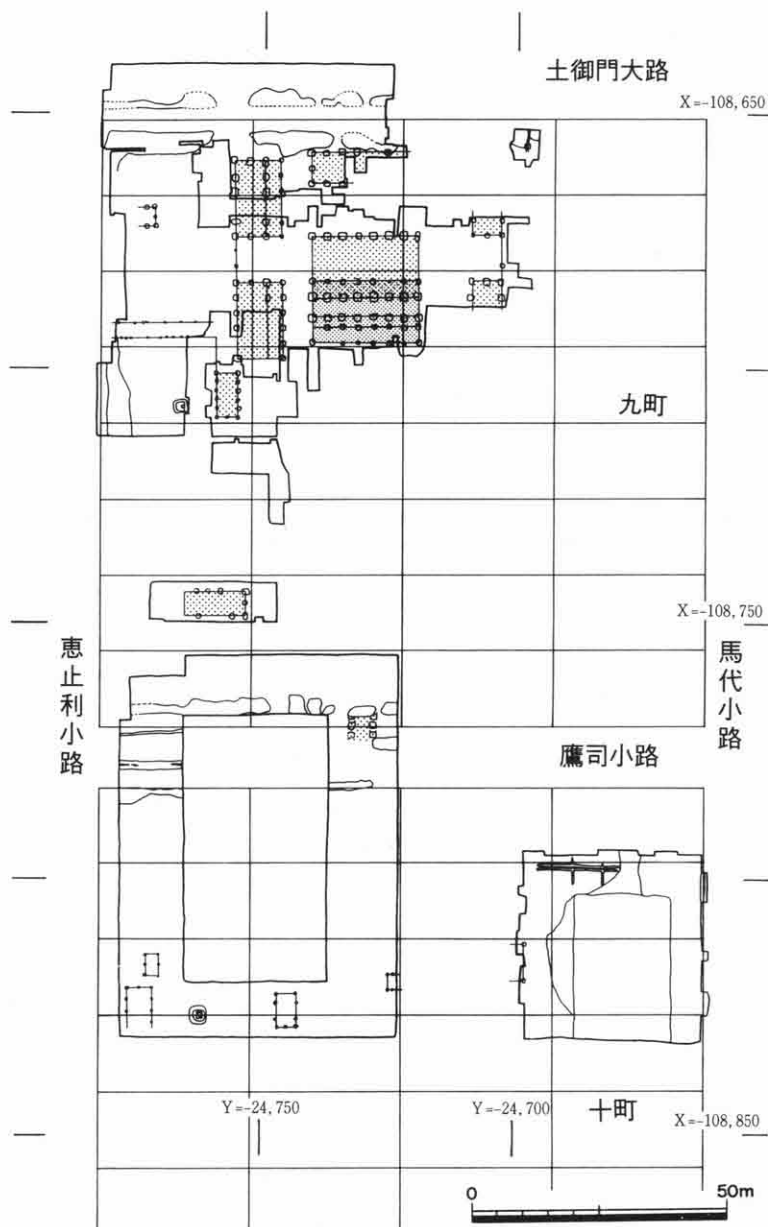
調査で検出した遺構を、時期別に大きく3期に区分した。

I期 平安京造営以前の遺構で、古墳時代後期(6世紀末)～奈良時代末(8世紀末)までの遺構をI期とした。今回の調査では、調査地内を斜行する溝 S D 98117 と建物跡 S B 9804 を検出した。調査地の西側には、花園遺跡が所在することから南東側にも遺跡が広がっていたと考えられる。

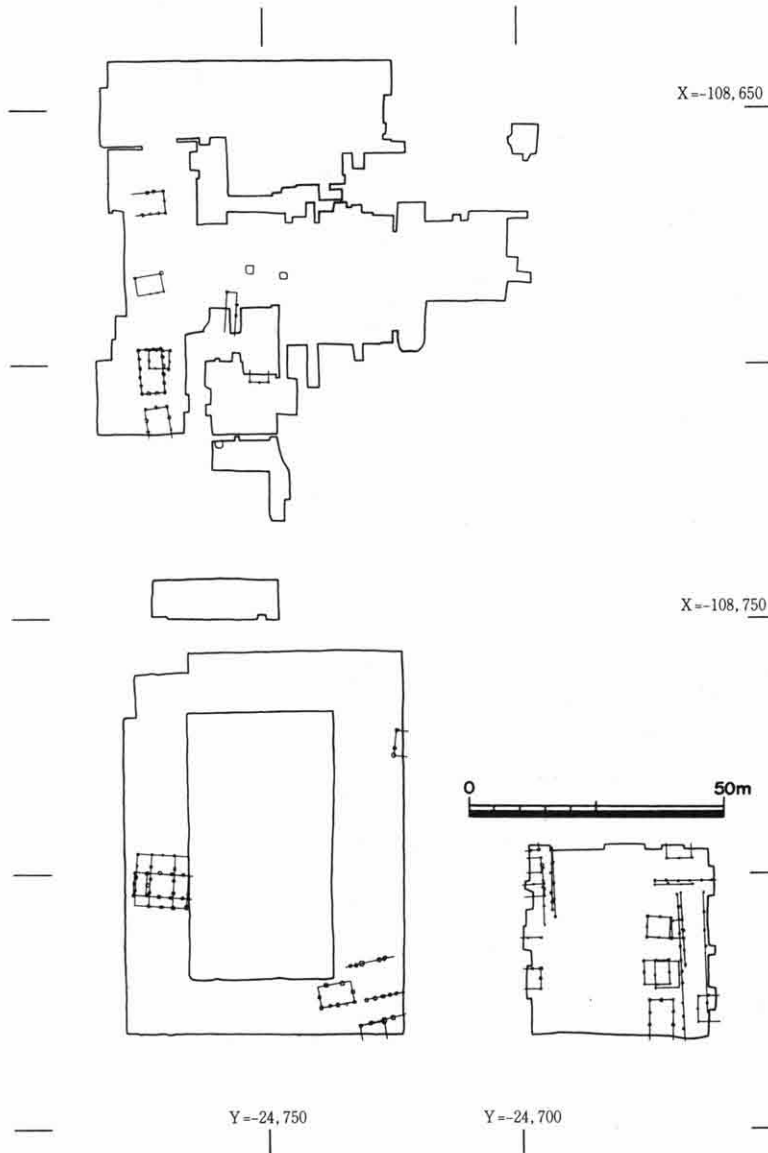
II期 平安京の条坊にしたがって建物などが造営される期間である。時代としては平安時代初期(9世紀初め)～平安時代前期(9世紀末)までである。

九町内の邸宅の存続期間は短命で、9世紀の初めには解体されていることが、過去の調査で確認されている。今回の調査では、九町域で邸宅に付随する南門や投棄用の土坑や溝を検出した。

十町内の遺構には、邸宅と同時期の遺構は検出されなかった。検出した建物跡(S B 9803・9805・9806・9809)は、邸宅が解体された後の条坊の規制を受けている9世紀末頃の建物群である。井戸 S E 98058 の時期も9世紀末～10世紀初めであり、同時期のものである。



第6図 II期の九・十町の遺構



第7図 III期の九・十町の遺構(1/1,000)

III期 建物などの遺構が条坊による方向の規制を受けなくなった時期である。III期の時期は、平安時代中期(10世紀初め～11世紀初めまで)である。九町域の邸宅の建物などが解体された後、再び建物が建てられる時期に当たる。溝 S D 99070の埋没後に建てられた建物跡 S B 9903や十町域の建物跡 S B 9801・9802・9807・9808がこの時期の遺構になる。これらの建物の方向は、条坊の方位とは関係なく不定方向に建てられている。

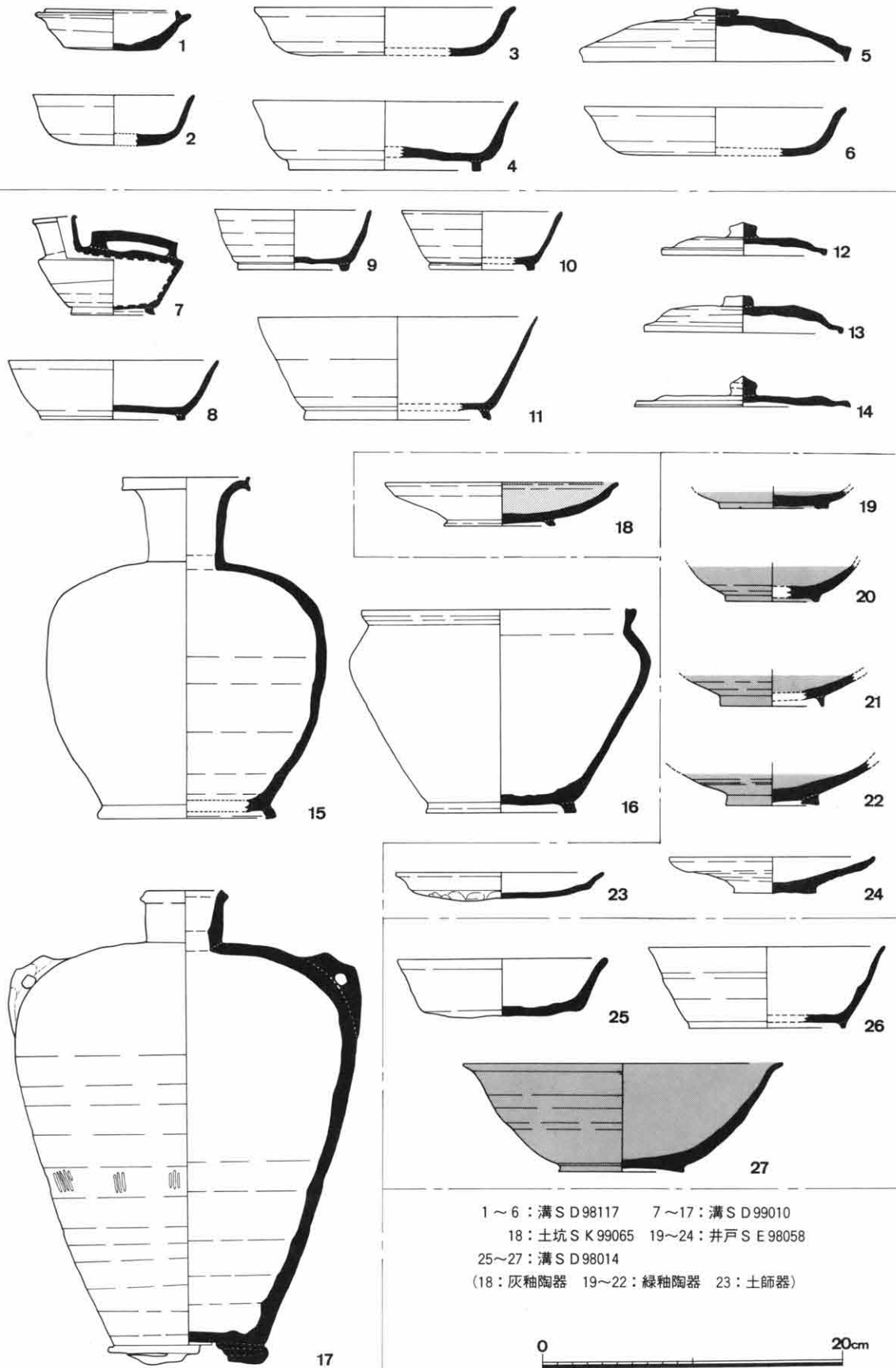
4. まとめ

今回の調査の結果、九町域では、宅地の南限を確認した。さらに、邸宅の中心建物の南延長に門跡 S B 9901を検出した。この門は、四脚門と呼ばれるもので、平安京内でこれ

ほど明確に検出されたのは今回が初めてとなる。南門が確認されたことから、大規模な邸宅は九町内に収まることが確定された。昭和54・55年度の調査で検出された九町の邸宅跡は、寝殿造りの邸宅の原型とも考えられており、今回の門跡の検出により九町の邸宅の計画性の高さと貴族のランクの高さをうかがい知ることができた。また、築地の内側溝の位置に投棄用の溝や土坑があり、埋土からは邸宅の解体された時期と同時期の遺物が多く出土した。

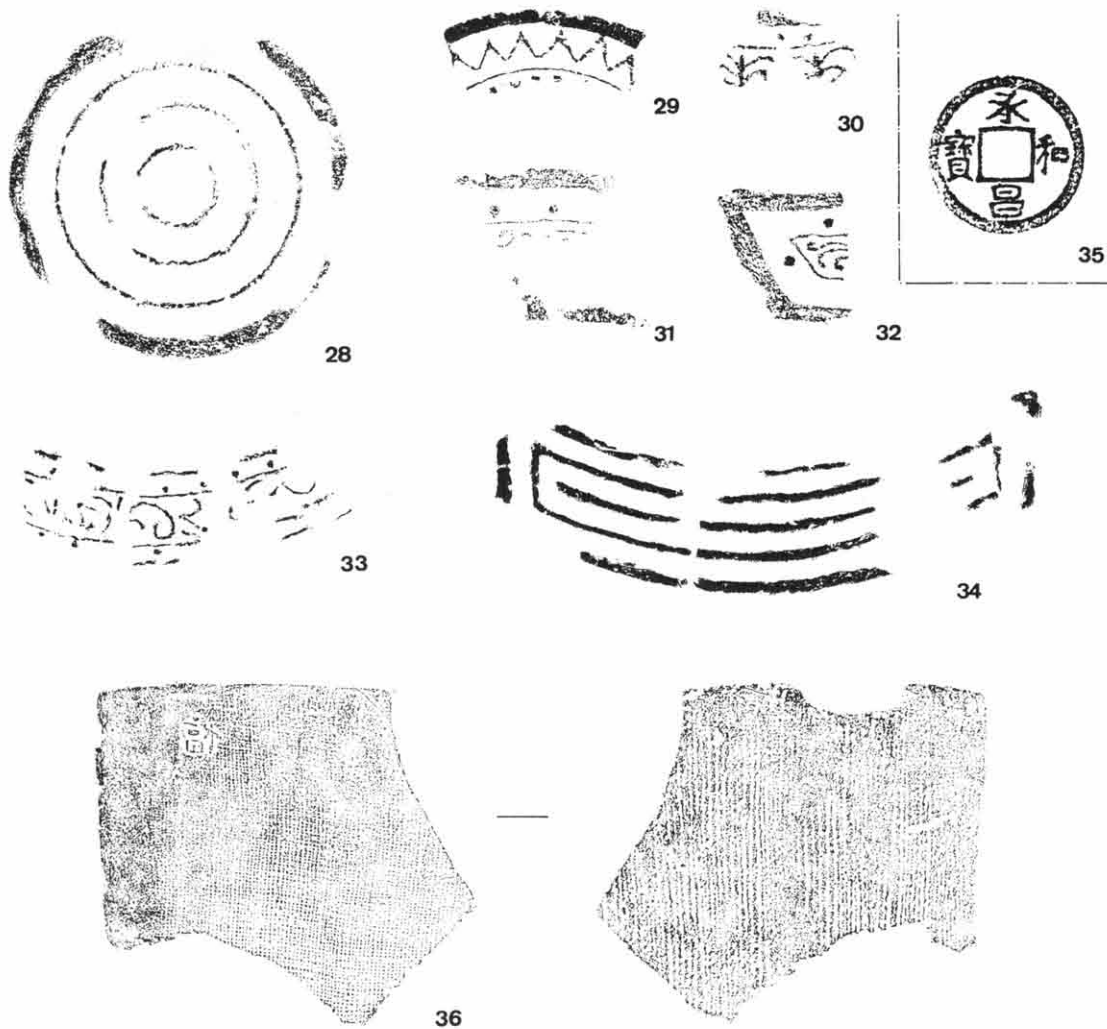
十町域では、建物は調査地の南側に集中し、時期ごと遺構の配置によって宅地利用の変遷が確認できた。しかし、邸宅と同時期である9世紀初めの遺構は検出されず、邸宅が存続していた時期は、十町の北西部分は建物が建てられていなかった可能性がある。

また、検出した遺構の配置から九町と十町を分ける鷹司小路の位置を想定することができた。鷹司小路の路面や築地の地業跡は確認できず、後世に削平された可能性がある。今回の調査で確認できなかった築地の構造や鷹司小路の両側溝の明確な位置の特定、十町域の遺構の性格などについては、まだまだ不確定なものがある。それらについては、今後検討を加えるとともに、今後



1～6：溝S D98117 7～17：溝S D99010
 18：土坑S K99065 19～24：井戸S E98058
 25～27：溝S D98014
 (18：灰釉陶器 19～22：緑釉陶器 23：土師器)

第8図 出土遺物実測図



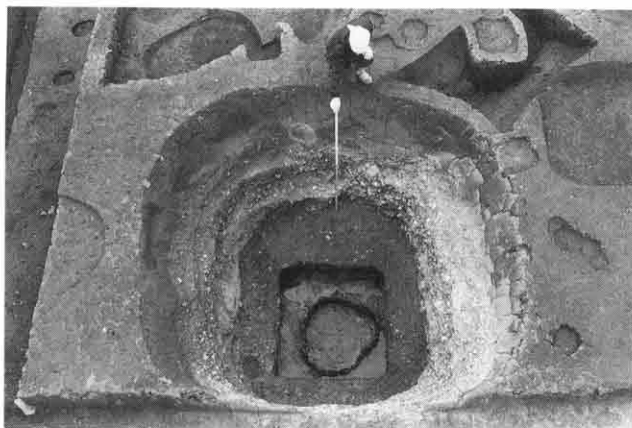
28：土坑 S K 99065 29・30：溝 S D 98014 31：土坑 S K 99085
 32～34：溝 S D 99010 35・36：井戸 S E 98058
 (32のみ原寸大)



第9図 出土遺物拓影(28～34・36：1/2 35：等倍)

の周辺の調査によって良い資料が得られることに期待したい。

(むらた・かずひろ＝調査第2課調査
 第1係調査員)



井戸 S E 98058全景(東側から)

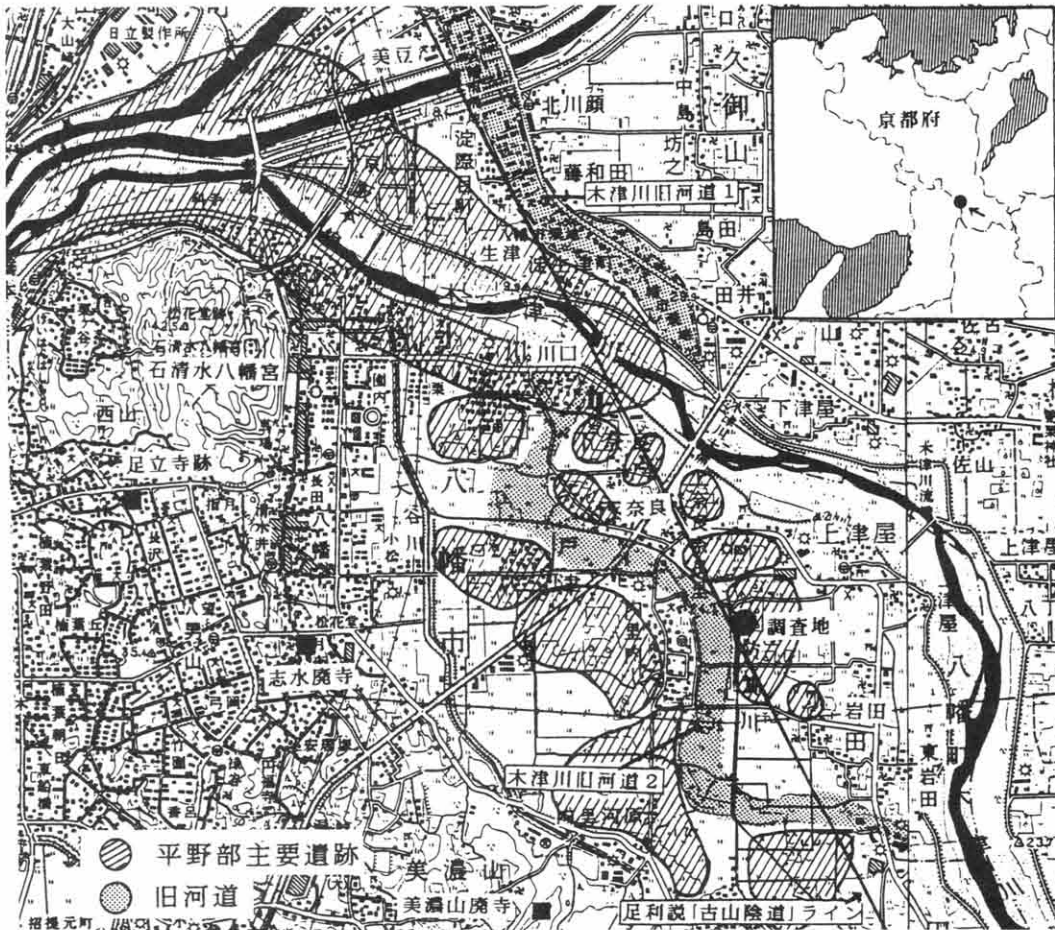
やわたしうちさとほうちょういせき 八幡市内里八丁遺跡の道路状遺構

森下 衛

1. はじめに

内里八丁遺跡は、八幡市の北東部、木津川西岸の沖積平野に位置する。(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、第二京阪自動車道路建設に先立ち、昭和63年度から平成11年度にわたって同遺跡の発掘調査を実施した。その結果、弥生時代中期から鎌倉時代の長期にわたる数多くの遺構・遺物が出土し、当遺跡が京都府内でも有数の大複合遺跡であることが明らかとなった。^(注1)

こうしたなか、平成6～10年度の調査で奈良～平安時代の道路状遺構が検出された。当地付近は、従来から足利健亮氏によって推定されている古山陰道が通過するとされており、また検出した道路状遺構の所属時期やその規模などからみて、調査担当者の一人として、これが古山陰道の痕跡である可能性は極めて高いと判断した。しかし一方で、古山陰道は足利説とは別のルートをとっていたとの説もあるうえ、今回検出した道路状遺構が足利説のルートと完全に一致してい



第1図 調査地位置図(1/25,000)

ないなどの問題点も残されている。

本稿では、検出した道路状遺構の概略を紹介するとともに、こうした問題点についても少し考えてみることにしたい。

2. 遺跡の位置

内里八丁遺跡は、京都府八幡市内里に所在する。ここは、山城盆地の西端部付近にあたり、石清水八幡宮の鎮座する男山丘陵からは東方約3.5kmに位置する。内里八丁遺跡の周辺には、第1図に示したとおり、数多くの集落遺跡が分布するが、同時に木津川の旧河道と考えられる流路の痕跡も多く認めることができる。なかでも、遺跡の立地と深い結びつきが考えられるのが、図中に網カケで示した木津川旧河道2である。現在の八幡市岩田付近から西方へ流れた後、内里集落の東側を北流、その後は上奈良集落の南方で再び西方へ流れを変える。また、この旧河道の両岸部には自然堤防状の微高地が形成され、内里八丁遺跡を含め、周辺に所在する集落跡は、この自然堤防と深く結びついて立地している。さらにこれは、旧綴喜郡と旧久世郡の郡境をなしていたともいわれている。

なお、このうち現在の地名で、岩田・上奈良・下奈良・川口・生津・際目・美豆と続くラインは、主に流路跡の東岸に形成された微高地が連なる部分に相当するが、ここは先述の足利説古山陰道の通過するラインでもある。

3. 道路状遺構と奈良～平安時代の内里八丁遺跡

内里八丁遺跡の発掘調査は、広範囲な調査対象地をA～Gの7地区に分けて順次行った。道路状遺構を検出したのは、このうちD・E地区であり、両地区における奈良～平安時代の主要な遺構の配置を第2図に示した。

(1) 道路状遺構

調査で検出した道路状遺構は、幅約12mを測り8世紀中葉～9世紀前半に機能していたと考えられる道路状遺構1と、幅5～6mを測り9世紀中頃～10世紀初頭頃に機能していたと考えられる道路状遺構2の二者がある。

道路状遺構1は、側溝と考えている2条の溝(S D97219・S D97217)に挟まれた部分で、調査区内を南南東から北北西方向にのびる。両溝は、心々で約12mを測り、ともにほぼ同規模・同形態をなす(幅約1.8m・深さ約1.2m、断面は逆台形に近い)。両溝によって示される道路状遺構は、路面が遺存していたわけではない。これを道路遺構と判断した理由は、規模の類似した2条の溝が側溝として機能したごとく平行して延びていること、溝が機能した奈良～平安時代の遺構(柱穴や溝・土坑)が溝の周囲で多数確認されているにもかかわらず、この両溝の間では全く確認されなかったことなどによる。

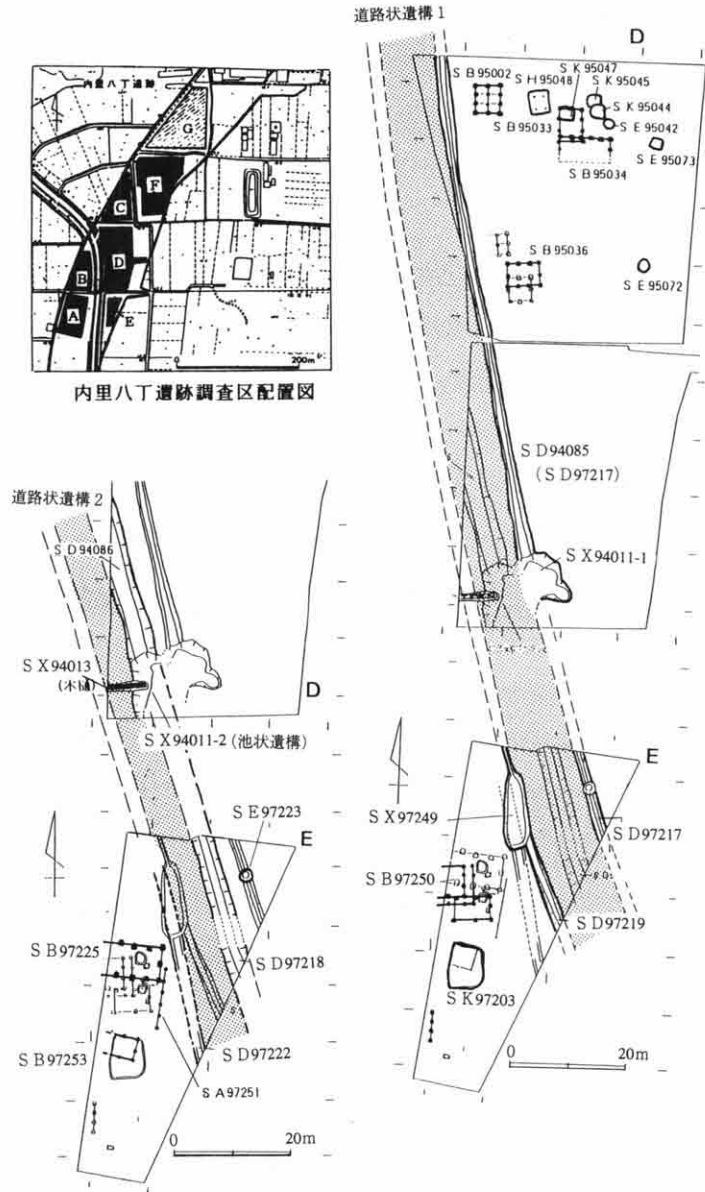
西側溝に相当するS D97219は、E地区の北端近くで池状遺構(S X97249)に一旦流入し、さらに北北西へのびる。S D97219を検出したのは、このE地区の約30m間に限られるが、東側側溝

と判断している S D97217 は、D 地区 (S D94085) を含め、総延長約 150m にわたって確認した。S D97217 (S D94085) は D 地区南端で池状遺構 (S X94011-1) に流入し、北方へのびる。なお、検出部で最も低くなるのは D 地区と E 地区との間だったようで、E 地区の S D97217 は北へ、D 地区の S D97217 (S D94085) は南へそれぞれ溝底部が傾斜していた。また、S D97217 は、一直線に延びるのではなく、検出部南端付近で N25° W、同北端付近で N7° W と、北へ向かうに従い西方への振れを減ずる。

出土遺物 (側溝内を中心とする) は、主に須恵器・土師器の杯身・杯蓋類であるが、中に製塩土器や土馬、また和同開珎などが含まれていた。土馬は S X97249 から、和同開珎は S X94011-1 からそれぞれ出土したものであり、この池状遺構近辺で祭祀的な行為が行

われた可能性を示唆する。また製塩土器は S D97219 の溝底部からまとめて出土しているが、道路状遺構南西部にある土坑 (S K97203) から同時期の土器類とともに多くの製塩土器が出土し注目された。S K97203 は、南北約 7m・東西約 6.5m の長方形に近い平面形態をなすが、深さは 10~15cm と浅い。その埋土には焼土や灰を多く含み、遺物は 1m 前後の範囲でブロック状に集中して数か所から出土した。やはり、何らかの儀式的行為に使用されたものを同一地点に複数回にわたって廃棄した状況を呈していた。

一方、道路状遺構 2 は、幅約 4m の S D97218 と幅 2m 前後を測る S D97222 がセットをなすものと判断している。しかし、両溝の規模に明らかな差異が認められることや、S D97222 の遺存状況が極めて悪いことなどから、道路遺構としての確証は無い。ただ、D 地区で検出した S X94011-2 が大きく西方へ移動するとともに、これに流入していたと判断される木樋 (S X94013) が道路状遺構 2 に対応するように存在しており、こうした状況は道路の存在をうかがわせる材料



第 2 図 内里八丁遺跡遺構配置図

と考えている。出土遺物は主にS D97218から出土しており、9世紀中葉から10世紀初頭の土器類が主体をなす。また、これに土馬やミニチュア竈、墨書土器(意味不明の記号か)などが含まれ、やはり何らかの祭祀が行われていた可能性が高い。これが道路であれば、8世紀中葉から9世紀初頭に機能した道路状遺構1が、規模を縮小して道路状遺構2へと作り変えられたこととなる。

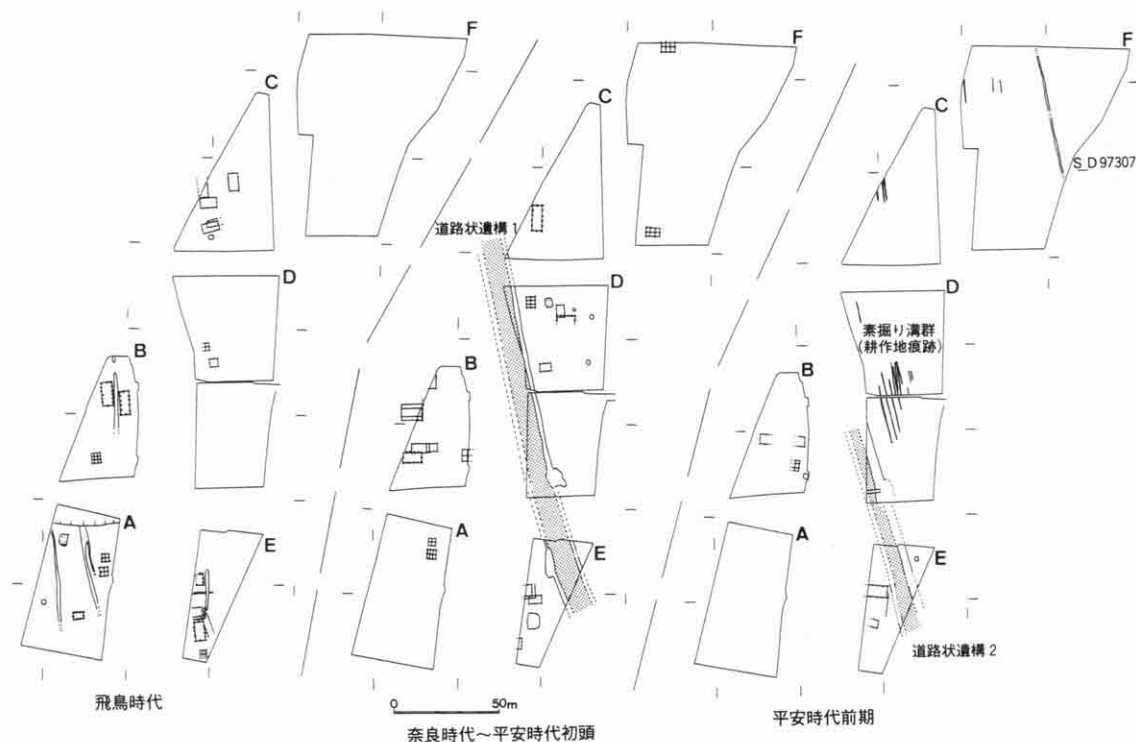
(2) 周辺の遺構群

内里八丁遺跡の発掘調査では、弥生時代後期から鎌倉時代にわたる時期の各種遺構が検出されている。このうち、本稿に関連するのは7世紀から10世紀の遺構・遺物である。以下、これらを時期別に整理し、道路状遺構との関連について紹介する。^(注3)

飛鳥時代(7世紀) 道路状遺構1は、側溝出土の遺物から見る限り、いまだ造作されていなかったと考えられる時期である。ただ、道路状遺構1の周辺で検出された遺構の状況からは、若干の検討が必要となる。というのも、内里八丁遺跡全体の様相としては、7世紀中葉を画期として竪穴式住居跡がほぼ姿を消し掘立柱建物跡が出現するが、なかでも7世紀末葉～8世紀初頭頃には、遺跡内に大型の掘立柱建物跡が散見されるようになる。すなわち、この頃を境に遺跡の性格が変化した状況が認められるのである。こうした様相は、B・E地区に顕著に認められ、2間×5間～6間の南北棟建物跡に加え、倉庫と考えられる3間×4間の総柱建物なども確認されている。また、C地区では柱間の狭い(1間が1.3m前後)倉庫風の建物跡が集中して検出されるとともに、小鍛冶の痕跡も認められた。明らかに一般的な集落とは考えがたい状況をなしている。一方、出土遺物では、注目されるものに古瓦類がある。数量的には決して多くはないが、周縁に面違鋸歯文を配し、内区に複弁蓮華文を飾る軒丸瓦片(川原寺式軒丸瓦か)、三重弧文の軒平瓦、凸面の叩をナデ消す桶巻き作りの平瓦などが認められる。ただし調査では、古瓦類が使用された建物跡の特定はできていない。

奈良時代～平安時代初頭(8世紀～9世紀初頭) 道路状遺構1が造作され、機能していたと判断される時期である。この時期の遺構群は、全ての調査区に広がりを見せる。うち、建物群はその主軸から、N2～3°W、ほぼ北を向くもの、N2～4°Eの3群に大別され、このうち主軸がN2～3°Wおよびほぼ北を向くものは8世紀前半～中葉、主軸が東へ振るものは8世紀後半～9世紀初頭頃に位置づけている。こうしたなか、8世紀後半頃に建物規模の大型化・出土遺物量の増加といった面で大きな変革を認める。建物規模の大型化といった面では、2間×5間の建物が顕著に認められるとともに、柱掘形もそれまでのものが一辺50cm前後の方形の柱掘形であるのに対し、この時期のものは一辺1m近くとなる。出土遺物では、出土量が非常に多くなるとともに、平城京タイプの軒丸瓦をはじめとする瓦類や石帯、道路側溝などから出土している製塩土器・土馬・和同開珎など注目すべきものが含まれる。

平安時代前期(9世紀中葉～10世紀初頭) 幅をせばめて造り変えられた道路状遺構2が機能したと考えている時期である。この段階には、道路状遺構を挟んでその西側と東側では大きく土地利用に差異が生じる。すなわち、その西側には幾つかの掘立柱建物跡が散在していた状況が認められるのに対し、東側では耕作地の痕跡を示す素掘り溝群が顕著に分布し、東側一帯は一気に耕



第3図 飛鳥～平安時代主要遺構変遷図

作地へと転化されたことを示している。なお、素掘り溝群は、道路状遺構2と同一の方向を向いており、かつ道路状遺構2から東方約110m近く(F地区)で検出したS D307は、これによって規制された地割りの痕跡を示している可能性が高い。

以上、内里八丁遺跡発掘調査における、飛鳥時代・奈良時代～平安時代初頭・平安時代前期にわたる主要遺構の変遷の概略を紹介した。ここでは、(1)飛鳥時代でも7世紀末葉頃に大型の掘立柱建物が出現するとともに、古瓦を使用した建物が遺跡地内に設けられるなど、遺跡の性格に大きな変革が訪れた、(2)8世紀後半には再び大型の掘立柱建物が各所に設けられるとともに、やはり古瓦を使用した建物が存在した、(3)9世紀前半には遺跡の東半部は急激に耕作地へと変化し、西半部にわずかに建物が散在する程度となる、といった変遷が確認できた。そして、遺跡の変遷が道路状遺構と深く結びついていたとすれば、道路状遺構1は7世紀末葉頃には造作され、9世紀初頭頃には遺跡の性格の変化とともに廃絶し、造り変えられたと想定することも可能であろう。ちなみに、道路状遺構1と切り合い関係を有す遺構をみると、道路状遺構造作以前のものとしては7世紀中葉の竪穴式住居跡が最も新しく、廃絶以後のものとしては9世紀中葉の井戸が最も古い。すなわち、道路状遺構1はこの間に機能したとも考えることができるのである。また、内里八丁遺跡は、少なくとも7世紀末葉と8世紀後半頃に一般集落とは様相を異にする公的な施設が設けられた可能性の高いことも確認できたものと考えている。

4. 古山陰道の復原ルートと内里八丁遺跡

前節においては内里八丁遺跡で確認した2条の道路状遺構を紹介するとともに、その周辺で検出した飛鳥時代～平安時代の遺構群の変遷と道路状遺構との関連について述べた。ここでは、改

めて、道路状遺構1が古代幹線道路の痕跡である可能性の高いこと、内里八丁遺跡がその沿線に設けられた公的施設であったと考えられることなどが提示できたものと考えている。しかし、先に述べたように、これを足利氏のいう古山陰道に結びつけるにあたっては、いくつかの問題点も残されている。それは、実際の検出遺構自体が有す問題と、また足利説による復元ルートに関する問題に大別される。

(1)道路状遺構の検討

道路状遺構自体が有す問題点としては、道路状遺構の検出部分が足利説には完全には一致しない、側溝からの出土遺物からみて道路が機能した時期が8世紀中葉から9世紀初頭と判断される(全国的に古代幹線道路の多くは7世紀後半頃には造作されたとされる)、といった2点である。

このうち、足利説復元ルートと完全に一致しない点に関しては、遺跡の西側を流れる大規模な流路痕跡と深く関係するものと思われる。この旧流路が遺跡の立地する自然堤防を形成したことはすでに述べたところであるが、旧流路の痕跡をたどると、遺跡地の北西部で大きく流れを西方へ変えることが確認される。そして、道路状痕跡を足利説にしたがってたどると、ちょうどこの流路痕跡の屈曲部にあたってしまうこととなる。道路は、この流路による微高地の浸食、そしてこれによる道路の崩壊を避けるため、より地形の安定していた東側へ迂回していたとも考えることができる^(注4)だろう。

一方、道路状遺構の機能した時期に関しては、側溝は長期にわたって使用されており、底さらえなどが行われたことは間違いなく、造作当初からの時期を示す遺物が出土しなくても支障はない。先に遺構の変遷に関するも述べたように、道路状遺構1と遺構の変遷の連動状況を考え合わせても、やはり7世紀末葉に道路状遺構1が造作された可能性は極めて高いと判断される。

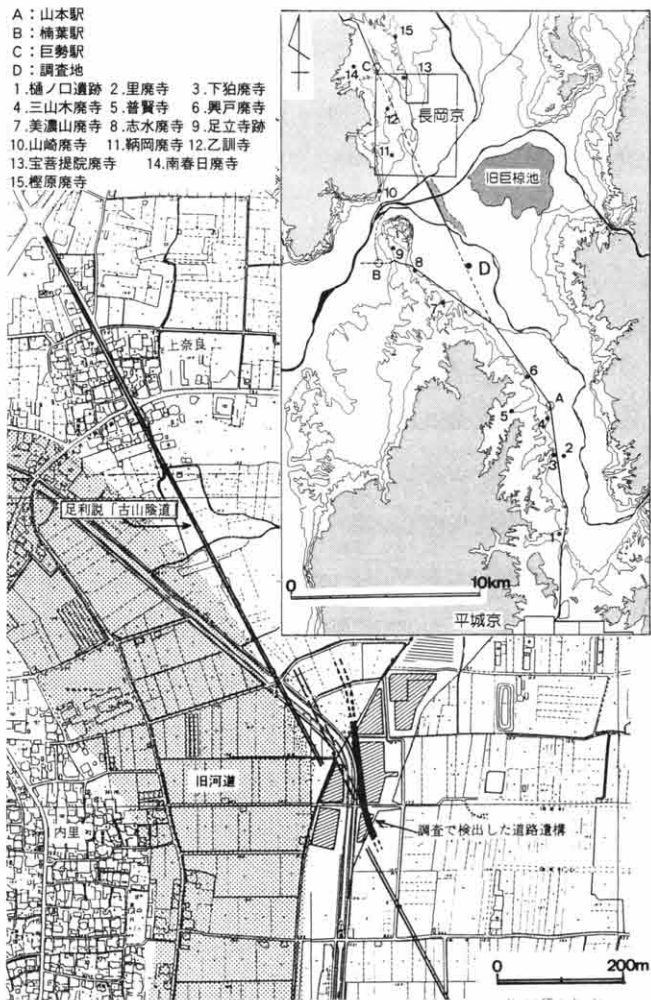
(2)足利説「古山陰道」について

足利説による古山陰道の復元ルートは、山城南部地域では山陽道との併用道として木津川西岸を北上し、現在の京田辺市北端近くの岡村付近で両道が分岐するとされる。分岐した古山陰道は、そのまま直線的に北西方向へ進み、現在の八幡市東部において岩田集落西側から上奈良集落・生津集落を通り、さらに木津川旧河道の西側堤防上を通過し、淀川を渡って乙訓方面へ向かうという。この間、岩田集落から上奈良集落の間には、道路の痕跡を示す地割り等は認められないが、上奈良集落から北西方向へのびる現在の府道から木津川旧河道西側堤防上のラインは、この想定を裏付けるかのように、ほぼ一直線に連なる。一方、乙訓地域では長岡京期の条坊施工により道路痕跡は消され、長岡京が営まれなかったその北辺部で再び痕跡が現われ老ノ坂へと向かうというものである。そして、今回の調査は、こうしたルート上における道路の痕跡が認められない位置で道路状遺構を検出したこととなり、足利説の妥当性を評価すべき事例となったわけである。

しかし、従来から、岡村ー上奈良および長岡京域の間に痕跡が残っていないこと、さらに岡村ー淀川の渡航点までの間は木津川旧流路などの諸河川によって洗われた低地に位置していると考えられてきたことなどから、足利説復元ルートに対して否定的な見解が相次いで提唱されてきた。この場合、山陽道との併用道として木津川西岸を北上した山陰道は、足利説のように分岐せ

ずに推定山陽道のルートをとどめて男山丘陵をこえて楠葉へいたり、さらに北上して現在の橋本付近で大山崎へと渡ったとされる。^(注6)

今回の調査成果のみでこれらを一気に解決し、古山陰道のルートを足利説と結論づけることは難しい。長岡京域における延長線上での道路遺構が未確認な点をはじめ、淀川の渡河点などの問題が残されているからである。ただ、ルート上の地理的環境といった面を検討すれば、先に内里八丁遺跡において述べたように山陽道との分岐点とされる現京田辺市岡村から淀川の渡航点までは基本的に自然堤防状の微高地が連なって存在しており、逆に足利説の如く、木津川旧河道の西側堤防の築堤を想定しなくても、この微高地上に直線的に道路を設置することは可能だったようにも思われる。少なくとも淀川の渡航点までは、低湿なため古代の幹線道路が設け難いといった地理的な要



第4図 足利説「古山陰道」と道路状遺構

因は認めがたいと思うのである。なお、近年、高橋美久二氏によって復原された山城国久世郡条里^(街)によれば、現在の八幡市北東部における足利説復原ルート西側に接する部位に「路里」という里名が存在したこととなる。この里名の存在は、当時、近傍に道路が通っていたことを示唆するものとも考えることができ、当地における古山陰道の存在を示す一つの材料となると考えている。

5. おわりに

以上、内里八丁遺跡で検出された道路状遺構に関して、これが足利健亮氏のいう古山陰道の痕跡ではないかという点を紹介した。そして、幾つかの状況証拠は提示できたものと考えている。しかし、調査で確認した範囲が極くわずかであったことや足利説による古山陰道の復原ルート自体に関して、さらに解決しなければならない問題を残しているのが現状であり、明確な結論にはいたっていない。

近年、これまで主に歴史地理学の分野から提唱されてきた古代道路に関して、考古学の分野から実際の遺構の検出といった面で新たな知見が数多く提唱されるようになってきた。ここ、京都府南部においても若干遅ればせながら古山陰道や古山陽道に関して少しずつ資料が蓄積されつつ

ある。とはいいつつも、直接的な道路遺構の検出は未だ数少なく、道路想定地周辺における同一方向の地割りを示す遺構の検出など、間接的な遺構検出にとどまっている場合が多い。こうした状況においては、結論を急ぐ必要はないだろう。今後の資料増加を期するとともに、さらなる調査研究に励むこととしたい。

(もりした・まもる＝調査第1課資料係調査員)

注1 各年度毎の調査成果については、概要報告書を刊行しており、これを参照願いたい。

注2 足利健亮『日本古代地理研究』大明堂発行 1985

注3 以下の記述における飛鳥時代～平安時代の主要遺構の変遷に関しては、現在作成中の報告書で詳しく検討を予定しており、ここでは概略のみを紹介する。

注4 足利健亮氏の御指摘・御教示による。

注5 足利説による古山陰道復原ルートに否定的な見解を提示されている主な論考は以下のとおり。

中山修一「木津川流路の変遷」(『京都家政短期大学研究紀要』第12集) 1973

小林 清「長岡京造営の基準点」(『長岡京の新研究』全 比叡書房) 1985

注6 岩松 保「第5章 総括」(『百々遺跡 京都府遺跡調査報告書』第24冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998 本文献では、楠葉-橋本-大山崎を経た古山陰道が乙訓地域の西辺を北上するというルートを復原する説が示されている。その大きな論拠は、長岡京造営範囲において足利説を裏づけるような道路痕跡が確認されていないこと、乙訓地域西辺部における集落跡・古代寺院跡などの分布などとされている。このうち、後者に関して、古代の幹線道路である古山陰道が、はたして集落跡間を結ぶ道路の延長として復原できるのか、はなはだ疑問を感ずる。ましてや、その古山陰道が当地において、氏の言う各集落間を繋ぐメインストリートとなりえたとはどうも考えられない。古代の幹線道路というものの性格を改めて検討し、再考を願いたいと考えるところである。また、前者については、確かに足利説復原ルートの延長上でこれに相当する道路痕跡は未確認であるが、ルート上の広範囲が調査されているわけではなく、今後の調査に期することは許されるものと考えている。

注7 高橋美久二「第5章-3 正道官衙遺跡と条里」(『正道官衙遺跡 城陽市埋蔵文化財調査報告書』第24冊 城陽市教育委員会) 1993

本稿執筆中に足利健亮先生の訃報に接した。足利先生の数多くの業績は述べるまでもないが、ここ京都府南部においても恭仁宮・京の復原や山陽道・山陰道をはじめとする古代幹線道路の復原など多くの説を提唱されてきた。また現地にも気軽においでくださり、我々調査担当者に常に的確な御指導をいただいていた。ここに報告した内里八丁遺跡の発掘調査も例外ではなく、足利先生には多くの御教示並びに御指導をいただいた。深く感謝いたしますとともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

奈良・平安時代における乙訓地域の交通路

— 西国街道^{さいごくかいどう}の成立とその変遷 —

岩松 保

1. はじめに

筆者は、名神高速道路の拡幅工事に伴い、大山崎町内の百々遺跡の発掘調査を担当し、平安時代にさかのぼる西国街道の路面・側溝および掘立柱建物跡などの遺構を検出した。

この時の知見では、9世紀初頭に西国街道が整備され、10世紀後半頃に西国街道の道幅がやや狭くなり、以後、道路はあまり整備されなくなるというものであった。9世紀初頭における西国街道の整備は、平安京の成立時期にあたり、乙訓郡、特に大山崎町の地理的条件と山崎駅・津といった施設の存在から、京都から西国に向かうための山陽道の整備と位置づけた。10世紀後半以後の路面の縮小は、それ以前と比べて山陽道による陸路の重要性が軽減したこと、あわせて、古代律令制の衰退に伴い、山崎駅・津や国府の機能が弱体化したためと考えた。

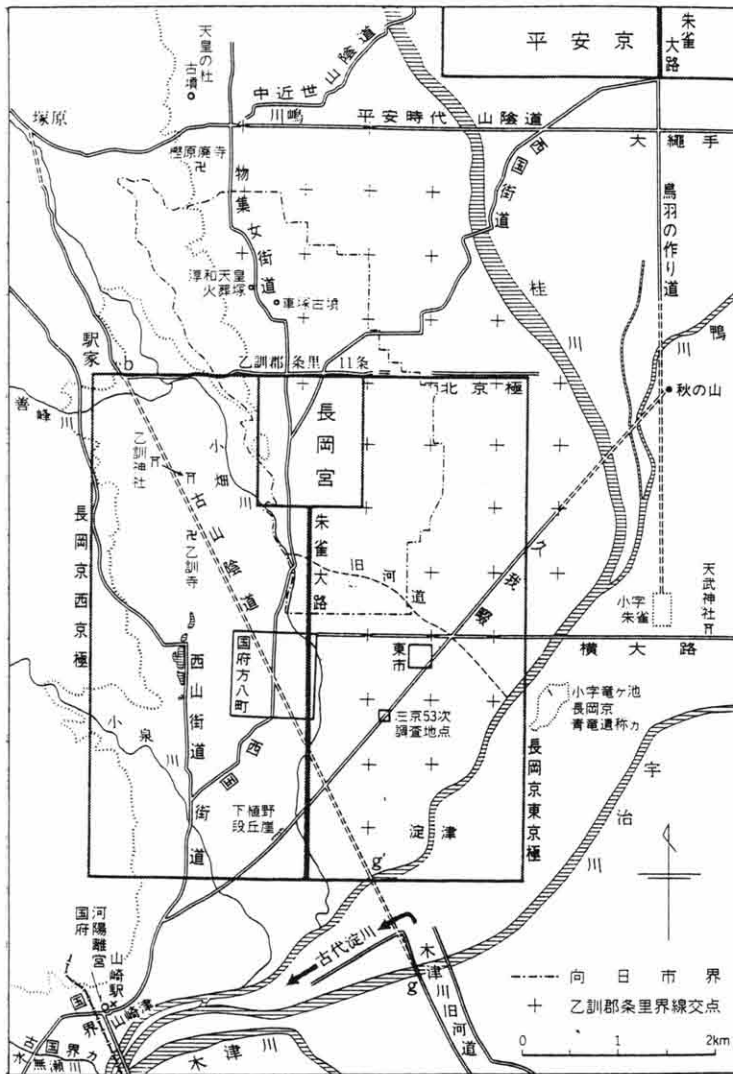
百々遺跡の調査報告書の一節で、遺跡の変遷を追う中で西国街道の成立を中心に乙訓地域の交通路を検討した。この小論は、その内容に手を加えて、論文としての体裁を整えたものである。

2. 乙訓地域の交通路概観

乙訓地域の中でも特に大山崎町は、北に天王山、南に淀川・男山が迫り、京都盆地から大阪平野に抜ける喉元として、古代より、交通の要衝地として位置付けられてきた。まず、乙訓地域に通じていた古山陰道、久我畷、西国街道を、大山崎町に焦点を当てて概観したい(第1図)。

平安京から山陰に向かう官道を山陰道と呼ぶのに対して、平城京から山陰に向かう道を古山陰道と呼称すると、乙訓地域には古山陰道が通じていた。『日本書紀』の垂仁紀十五年条に、竹野媛が丹波に帰る際に乙訓を通っており、『日本書紀』の編纂された奈良時代には少なくとも、大和から山陰へ向かう道が乙訓地域を通っていたことが推測される。古山陰道のルートには二つの考えがあり、一はいわゆる西山道であり、もう一つは足利健亮氏の主張する直線道である。西山道に関しては、『続日本紀』の和銅四(711)年正月条の、山陽道が平城京を出て、相楽郡→綴喜郡→河内国楠葉→摂津国嶋上へと抜けた記事から、山崎橋で淀川を渡って摂津国へ入ったと考えられている。そのため、山陰道は山崎橋で山陽道と分かれて北上し、西山道を経て大枝へと抜けて、山陰に至ったという説である。

一方、足利氏は歴史地理学の立場で古山陰道を復原し、木津川旧河道の左岸沿いの直線道路を古山陰道の名残りと考え、この道を北上し、乙訓郡内を直線的に斜めに横切って大枝へと抜けるルートを想定した。長岡京の造成により京域内の道路は廃されてしまったが、長岡京外にはその



第1図 乙訓地域の交通路(『向日市史』上巻 図129より転載)

痕跡が残ることを根拠にしている。近年、長岡京市では、北で西に30°弱振れて斜行する道路痕跡が確認され、神田古道と呼ばれる。足利説の古山陰道とは振れ角が違うこと、推定ルートから1kmもずれていることから、神田古道は古山陰道と考えられていない。この神田古道以外には、足利説の古山陰道に関連するような道路遺構は検出されていない。また、大まかに言うと、西三坊大路以西、七条大路以南では長岡京の条坊関連遺構が確認されていないので、足利氏の想定した長岡京の京域よりもその施工範囲はかなり縮小されていることが判明しつつある。もしそうならば、足利氏の言う古山陰道の痕跡が、長岡京の実際の施工範囲と合致しないという事実は、足利説の立論の

根拠を揺るがすものである。こういった点から、足利説の古山陰道を一旦横に置いて、古山陰道は山崎橋経由であったという前提で、以下の考察を進めたい。

ついで、久我畷について見ておこう。久我畷は大山崎町と鳥羽を結ぶ斜めの直線道路で、平安京の羅城門から真南に鳥羽作り道があり、この道と鳥羽で接続する。現在でこそ、田畑の畦道程度にしか残っていないところが大半であるが、先の足利健亮氏によって、平安京から西国に向かう山陽・南海道併用道の痕跡と考えられており、平安京新設とともに計画されたと唱えられている。平安時代前期の大山崎町には、山崎駅や山崎津、山崎橋、山崎離宮があり、西国との交通の上で、重要な位置を占めていた。しかも、平安時代には山城国府が乙訓の地にあり、政治的にも重要な地であった。山城国府は、都が平安京に遷ると国府の一部が平安京に編入されたらしく、延暦十六(797)年に「地勢狭隘なため」に「長岡京南」に遷している。これが第3次山城国府で、長岡京市神足周辺、長岡京市南栗ヶ塚周辺、向日市上植野周辺とともに大山崎町百々周辺がその候補地に挙げられている。ところが、百々遺跡では20回以上の発掘調査がなされているが、そういった様相は認められていない。平安時代の掘立柱建物跡を確認しているのはほぼ西国街道に面

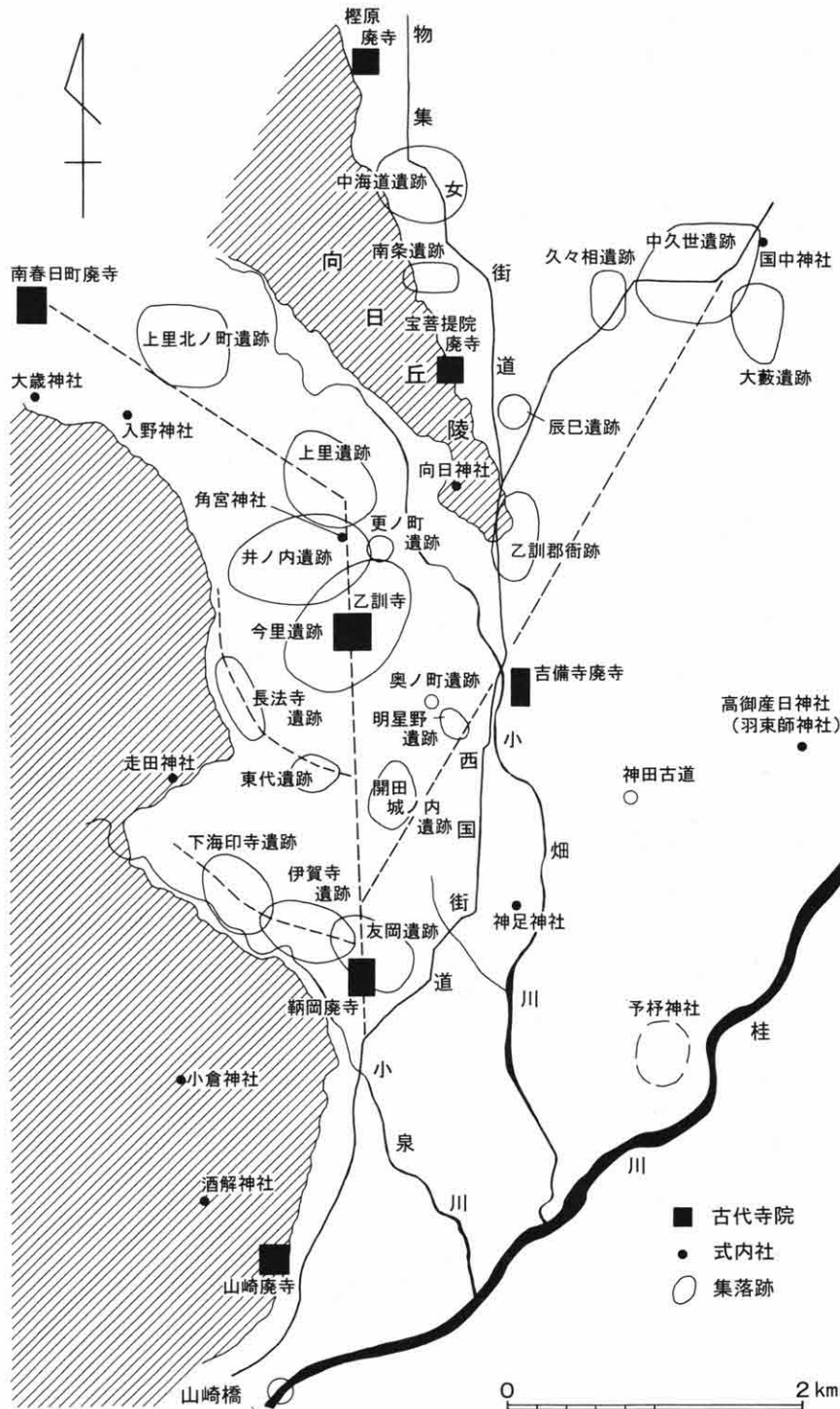
した範囲に限られること、大形の掘立柱建物跡は確認されずに小規模な掘立柱建物ばかりであること、これらの掘立柱建物跡の方位には規格性が認められないこと、多くの掘立柱建物跡に近接して井戸が検出されることから、小さな宅地が百々遺跡内に分立している状況である。それに対して、第4次山城国府は大山崎町にあったことが確実視されているもので、貞観三(861)年に、「山城国奏。河陽離宮。久不行幸。稍到破壊。請為国司行政処。但不廢旧宮名。行幸之日。将加掃除。許之。」(『三代実録』)とある。河陽離宮が久しく使われていないので、山城国司から国司行政処として用いることが請われ、これを許されている。この時点をもって、国府の政庁機能が河陽離宮に移ったと考えられており、現JR山崎駅周辺に比定されている。以上のように、乙訓地域は平安時代初頭から政治的にも重要な位置を占めており、直線道路=久我畷が敷設されるに十分な理由があった。

ところが、久我畷が文献に現れるのは、『徒然草』一九五段に「ある人、久我繩手を通りけるに」とあり、その人物が久我内大臣(久我通基)に会っている。久我内大臣の没年が1308年であるので、遅くとも13世紀後半には成立していたと言える。『太平記』では、元弘三(1333)年に「久我繩手は、路細く深田なれば馬の懸引も自在なるまじとて」と記されている。久我畷が文献に現れるのは、せいぜい中世段階である。

久我畷の発掘調査を見ると、大山崎町や長岡京市内で多くの調査が実施されているが、平安時代の路面や側溝はほとんど確認されていない。唯一、平安時代の久我畷が確認できたと報告しているのは長岡京跡左京第53次調査で、久我畷の造営時期を「長岡京期(784~794)をそう下らない時期(平安京遷都後の早い時期)」としている。久我畷側溝(S D 5320)からは、「杯B底部と土師器片が出土している」と報告されているが、この点以外の時期認定の根拠は状況証拠的なもので、実際には、「平安京遷都後の早い時期」を上限とするのが正しいと考えられる。そうすると、久我畷の敷設時期を平安時代初頭に求めるという根拠は、「交通の上で重要な山崎と鳥羽作り道とを直線的に結んでいる道路」という状況しかないのである。

西国街道は京都と西国とを結ぶ道で、京都府内のルートは、南は大山崎町から長岡京市・向日市を経て、寺戸あたりで物集女街道と分かれて、北東に向かい、吉祥院を経て東寺に至る道である。この道の成立はよく分かっておらず、足利健亮氏は、西国街道が長岡宮と平安京羅城門とを結んでいることから、長岡京の殿舎を解体した資材を平安京へと運搬する道が起源であると考えた。しかし、この考えでは、長岡京より北側の西国街道の成立については説明し得ても、長岡京より南の道路の成立や山陽道との関連などは説明できないし、平安時代の久我畷(=足利説によると山陽道)との関わりも理解しがたい。

発掘調査の成果を見ると、大山崎町内における調査では平安時代初頭~中期にかけての道路遺構が現在の西国街道にほぼ一致して検出されている。長岡京市域でも西国街道近傍で発掘調査が数多く行われているが、道路に面して調査がなされていないためか、中・近世の集落遺構が検出されているだけである。向日市域では、長岡宮跡第233次調査で西国街道の側溝が検出されている。報告によると、この溝が機能していた下限の時期は、この側溝の中から出土した遺物から、



第2図 奈良時代の交通路

は情報や物資をやりとりするための経路と言える。集落が他の集落から孤立して全く交通を結んでいない限り、交通路がそれぞれの集落間を繋いでいたであろう。これらの交通路は個々の集落毎に個別に、無秩序にとり結ばれていたのではなくて、集落と集落を有機的にとり結んだ交通路が、さらに大きなレベルで有機的な結合関係を有していたと想定される。しかも、交通路は、自然地形が許す限りにおいて最短距離を採るものと期待できよう。そのため、結果的には、葉脈状に分布した交通路上に、集落が数珠状に分布しているであろう。

「平安時代前半期、厳密にはそれ以降」である。このように、発掘調査によっても、その成立と変遷については、はっきりと分からない。

以上、乙訓地域に通じていた古山陰道、久我畷、西国街道を概観しつつ、それぞれの問題点とそれに対する考えを述べた。以上の知識を基に、節を改めて、奈良・平安時代における乙訓地域の交通路を検討したい。

3. 奈良時代における乙訓地域の交通路

まず、乙訓地域における奈良時代の集落跡・寺院・神社の分布から、当時の交通路を復原したい。ひとつひとつの集落もしくは数個が集まった集落群は、情報や物資を生産し処理する単位と考えられ、集落間をつなぐ「道」

さて、奈良時代にさかのぼる(可能性をもったものも含む)遺跡を地図上に落としたのが第2図である。集落跡には、今里遺跡・井ノ内遺跡など、多くの集落跡が分布している。古代寺院には乙訓寺をはじめとして、七寺がある。これらの寺院は少なくとも長岡京遷都以前の7世紀代に創建されたと考えられている。また、厳密には奈良時代に成立していたとは言えないが、『延喜式』所載の式内社は少なくとも『延喜式』が編纂された10世紀前半までには存在していたと言える。乙訓郡内には19座あり、図中には11座を示してある。これらのうち、文献より奈良時代に成立していたことが確認されているものがある。『続日本紀』の大宝元(701)年の勅に「波都賀志神」が出ており、高御産日神社と考えられている。また、大宝二(702)年条には、「山背国の乙訓郡に在る火電神」とあり、長岡京市井ノ内にある角宮神社と推定されている。全てとは言えないが、それらのうちのいくつかは、奈良時代には成立していたと考えられる。

以上のように考え、集落や寺院、神社などのかたまりの複合体に着目すると、檜原廃寺や吉備寺廃寺はやや不確かであるが、鞆岡廃寺と友岡遺跡、乙訓寺と井ノ内・今里遺跡と角宮神社、南春日町廃寺と大歳神社と上里北ノ町遺跡、宝菩提院廃寺と向日神社と辰巳遺跡・乙訓郡衙跡などがそういった複合体を形成している。古代寺院を欠くが、中久世遺跡などもこういった複合体の一種と見なせよう。こういった複合体を結ぶ形で、古代交通路が形成されていたと考えたい。そうすると、どのような経路で古山陰道が通じていたと復原できるであろうか。

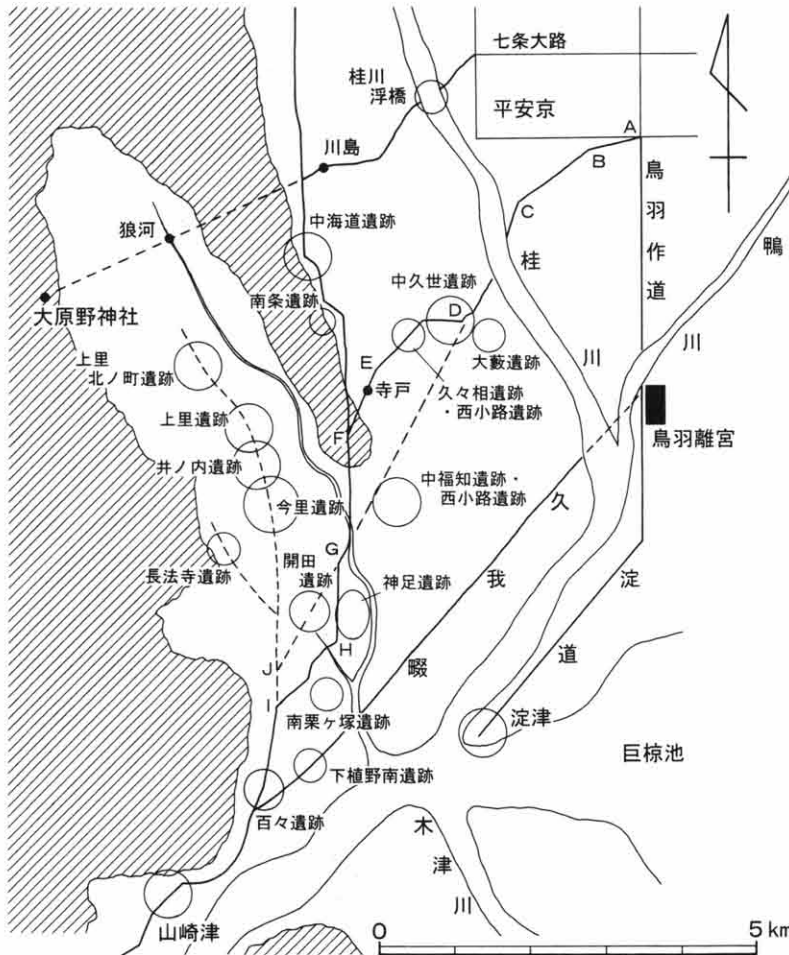
山崎橋を經由した古山陰道は、山崎院－鞆岡廃寺－乙訓寺とほぼ一直線に北上し、上里遺跡から西に折れて南春日町廃寺に至って沓掛へと北上すると考えられる。長法寺遺跡を經由して西山の裾を上里北ノ町遺跡にまで北上するのが、いわゆる「西山道」であるが、この道沿いには集落が分布しておらず、しかも、乙訓最大規模の奈良時代集落である井ノ内遺跡や今里遺跡の西端をかすめ、乙訓寺を大きくはずれるもので、メインストリートとは考えにくい。山崎院－鞆岡廃寺－乙訓寺－上里遺跡－南春日町廃寺をつなぐと、主要な集落はその道沿いに分布することとなり、まさにメインストリート＝古山陰道にふさわしいものである。鞆岡廃寺からは、伊賀寺遺跡・下海印寺遺跡への“枝道”が派生し、東代遺跡からは長法寺遺跡へと通じており、現在の西山道に一致する。

向日丘陵の東裾に沿って北上するルートも復原できる。乙訓郡衙跡から宝菩提院廃寺を経て檜原廃寺へと向かうルートであり、現在の物集女街道に一致し、このまま北上して、桂方面に向かったのであろう。さらに、久々相遺跡・中久世遺跡・大歳遺跡の集落へは、乙訓郡衙跡・辰巳遺跡付近から北東へ向かうルートがあり、そのまま桂川を渡り、愛宕郡へと至ったのであろう。

このように、遺跡や寺院の分布から、南北の3本の道と愛宕郡に抜けるルートが想定される。乙訓地域の奈良時代の交通路を復原すると、少なくとも大山崎町内の現西国街道は、古山陰道として機能していたと位置づけられよう。

4. 文献に見る平安時代の交通路

京都から乙訓に向かう平安時代のルートを文献から求めてみたい(第3図)。



第3図 平安時代の交通路

やや時代は下るが、寛弘二(1005)年に中宮彰子が大原野神社に行幸した際には、「閑院太政大臣の、にしの七条よりかへらせ給しをこそ・・・」(『大鏡』)とあり、乙訓に向かうには「にしの七条」を通ったことがわかる。また、『左経記』治安二(1022)年十一月一日条には、大原野神社行幸の道程とその清掃の分担が記載されており、「始自朱雀門至于七条大路、左京、始自七条大路至于浄福寺巽角、右京、始自巽角至于皮島中間、大和、始自皮島中間至于道寺、河内、自道寺至狼河、摂津、始自狼河至二鳥一居和泉、桂川浮橋、

山城(後略)」とあり、七条大路から西に出て、「皮島」を經由し、そのまま向日丘陵を横切って、大原野神社へと至ったようである。『小右記』の同年十一月二十八日には「行幸路橋(橋)殊不勞造、就中七条末橋騎馬人不能渡」とあり、「七条末橋」は「桂川浮橋」とも呼ばれていたことが分かる。このように、乙訓に至る一つのルートは、七条大路—浄福寺—皮島中間—道寺—狼河(—二鳥一居)で、桂川は七条の末にある浮橋を通るものであった。天延二(974)年に「津廻の事あり。仍って内を退きて西南に向かう。・・・鳥坂に至る。・・・先ず山崎津を廻る。」(『親信卿記』)とあるが、こういったルートを採用したかはこれだけでは不明である。西南に向かったことを重視すると、宮城から西南方向—七条で西へ向かうこのルートを採用して山崎に向かったと考えられる。このように、乙訓に向かう一つのルートは、七条から西に向かい、川島で南に折れ、物集女街道を南にとって大山崎へと至るもので、少なくとも、10世紀後半頃には成立していた。

違ったルートもあった。『今昔物語』巻二十七の四十二では、邦利延(くにのとしのぶ)が惑神(まどわしかみ)に惑わされたという物語が載っている。邦利延が三条院の天皇の石清水八幡宮への行幸の際に、九条にとどまるべきを何を思ったか長岡の寺戸にまで行き、さらに歩き続けて、そろそろ山崎の渡りにつくはずなのに、「おかしなことにまだ長岡の辺りを過ぎて、乙訓川の辺りを歩いている」と思っていると、寺戸の丘陵を上っており、寺戸を過ぎて、「今度は乙訓川を渡っている」と思えば、また桂川を渡っていた、とある。これは長和二(1013)年十一月二十八日

の三条天皇の八幡への行幸と符合する。注目されるのは、九条を起点にしていること、山崎へ行くのに寺戸を経由していること、乙訓川と桂川が寺戸からほぼ等距離に位置していた点である。このルートは、九条-桂川-寺戸-乙訓川-山崎という道筋であり、まさに現在の西国街道に一致する。『中右記』には、嘉保二(1095)年「往年被用山崎路、從院中程被用淀路也、当時最前已被用淀路了、仍申請今度用淀路也」とあり、それ以前は、石清水八幡への行幸には「山崎路」を用いていたとあるので、さきのルートが「山崎路」であったと言える。このルートは少なくとも11世紀には成立していたと判断される。

山崎道を上記のルートと考えると、久我暁はどう考えればよいのであろうか。淀津は平安京の外港と位置づけられ、西国からの雑物を運漕するための「功賃」が『延喜式』主税上に決められていた。公的には、物資や情報は山崎津ではなくて、淀津に集められ、平安京に送られる。また、「前滝津」という津には宇治津からの木材が集積されることが『延喜式』木工寮に記載されている。この津の位置はよく分からないが、鴨川流域の平安京南辺りと考えられている。このように、平安京にあっては、水運を利用して、京のすぐ近くにまで物資を運搬するシステムが作られている。それを山崎津で荷揚げし、わざわざ久我暁を通して物資を運ぶとは考えにくい。そのため、久我暁は西国の物資を平安京に運ぶために造られた山陽道とは考えにくく、平安京新設の時点で計画された道路と考える必要性もない。久我暁敷設の時期が、平安京新設の段階でないとしたら、次の可能性としては、鳥羽に離宮が設けられ、政治の中心として情報や物資が鳥羽に集積した時期に、直線道路=久我暁が設置されたのではなかろうか。鳥羽離宮は白河天皇が応徳三(1086)年に造営に着手している。山陽道を通じて西国と行き来する物資や情報を、大山崎と鳥羽離宮とを直接的に結びつけるために、直線的に最短のルートを採用したと考えられまいか。

5. 西国街道の成立について

第4節では、現在のルートで西国街道=山崎道が成立したのは11世紀までと考え、久我暁は平安時代後期に敷設されたと考えた。第3図には平安時代の交通路と集落の分布も図示している。奈良時代の集落分布から推定した道路にほぼ重なって、平安時代の集落が分布している。この図を基に、西国街道の成立を検討したい。結論的に言うと、西国街道は、奈良時代のもの(古西国街道Ⅰ)と平安時代前・中期頃までのもの(古西国街道Ⅱ)、現在の西国街道という変遷を経たと考える。平安京に都が移された後の古西国街道Ⅱが、山崎道であり、山陽道である。

奈良時代の古西国街道ⅠはC-D-G-Jで、そのまま南に下って、山崎に至る。

さて、現在の西国街道を見ると、Aは平安京との接合点で朱雀大路に一致しているが、B・Cでやや不自然に屈曲している。この屈曲は、A点に到達するための造作と考えられないだろうか。そうだとすると、C点以東は平安京造営直後の路線変更と考えられる。D-G-Jは奈良時代の古西国街道Ⅰのルートを踏襲し、D-G間には中福知遺跡・西小路遺跡が分布する。中福知遺跡は第3次山城国府とも考えられている重要な遺跡で、この遺跡上を通過する点は重要である。また、本来はG-Jとつながっていたのが、神足遺跡・南栗ヶ塚遺跡が成立し、それらとの関連か

ら、G-H-Iと迂回するようになったと考えられる(古西国街道Ⅱ)。

このように、平安時代前中期の古西国街道Ⅱは、基本的に奈良時代の古西国街道Ⅰを踏襲している。長岡京の条坊が施工されたのは、北はおよそEから南はIの範囲であるので、D以东とI以南の道は長岡京期にも廃されずに存在したと考えられる。注目されるのは、廃都直後にはD-G間が旧来の道に復されている点である。これは、中久世遺跡が長岡京期も継続して営まれておりD-Cが廃されずに残っていたこと、第三次山城国府と目されている中福知遺跡の存在が大きいであろう。

古西国街道Ⅱのルートは現西国街道のルートへと変更されるが、これは11世紀を下限と考えられる。足利氏が考えるように、長岡京の廃絶とともにその資材を平安京に運ぶための運搬路として成立したのがF~Dであろう。平安時代前期にはこのルートと古西国街道Ⅱが併存していたのが、現西国街道のルートにとって替わられるのであろう。百々遺跡の発掘調査では、10世紀後半頃に側溝の維持・管理がなされなくなり、路面幅も縮小しており、この段階で、社会情勢の変化のために、古西国街道Ⅱの重要性が減じたことが予想される。また、第三次山城国府の有力候補である中福知遺跡の動向などとも関わっているであろう。

6. まとめ

以上、百々遺跡をはじめとする西国街道の考古学的な知見と遺跡の分布から、奈良時代と平安時代における京都から乙訓地域への交通路を検討した。これらをまとめると、以下の点になる。

- ①集落などの分布から奈良時代の乙訓地域の交通路を復原し、古山陰道のルートを検討した。
- ②平安時代に成立した古西国街道Ⅱは、山陽道・山崎道として、奈良時代の古西国街道Ⅰを踏襲するものであった
- ③平安時代に京都から乙訓方面に向かうのに用いられたのは、古西国街道Ⅱの他に、川島回りの道があった。
- ④久我暁は白河院の鳥羽離宮造営以後に、西国の情報を直接に取り入れるために造られた。
- ⑤西国街道が現在のように向日丘陵を経由するのは、その上限が11世紀以後である。

(いわまつ・たもつ=調査第2課調査第3係主任調査員)

参考文献

- 『向日市史』上巻(1983)、史料編(1988)
『長岡京市史』資料編1(1991)、本文編1(1996)
『京都府遺跡調査報告書第24冊 百々遺跡』 1998

平成11年度発掘調査略報

31. 墓ノ谷古墳群第2次

所在地 竹野郡弥栄町字鳥取小字墓ノ谷・大久保松

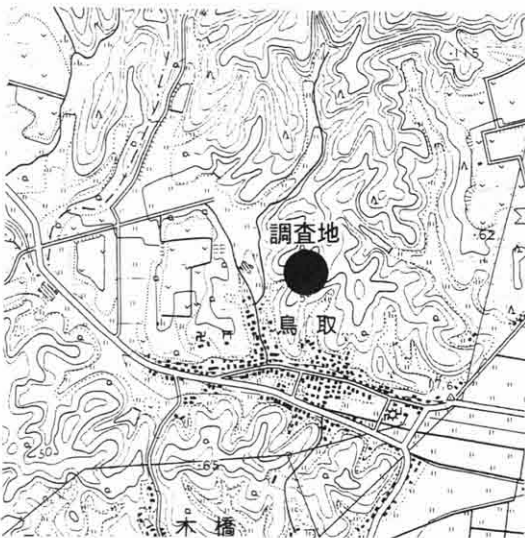
調査期間 平成11年5月11日～5月28日

調査面積 約140m²

はじめに 墓ノ谷古墳群は京都府竹野郡弥栄町字鳥取小字墓ノ谷に所在する。弥栄町教育委員会の実施した分布調査により11基の古墳・古墳状隆起が確認されている。平成10年度にはこのうち3基の古墳状隆起(6～8号墳)を調査し、いずれも自然地形であるとの判断がなされた。

調査概要 今年度は9・11号墳2基の古墳状隆起が調査対象となり試掘調査を行った。

9号墳 墓ノ谷古墳群の分布する主丘陵から南西方向へ派生する支尾根上、標高74m付近で確認された狭小な平坦面である。幅1.5m・長さ15mのトレンチを設定し、調査を実施した結果、遺構・遺物とも確認することはできず、また、土層、地山の状況からも人為的な整形の行われた痕跡は認められず、自然地形であると判断した。



調査地位置図(1/50,000)

11号墳 墓ノ谷古墳群の分布する主丘陵上、標高87m付近で確認された古墳状隆起である。墳頂部を中心に、「L」字形トレンチを2本設定し、主体部や墳丘裾の検出に努めたが、遺構・遺物とも確認することはできず、また、土層、地山の状況からも人為的な整形の行われた痕跡は認められず、自然地形であると判断した。

まとめ 今年度は墓ノ谷古墳群内で2か所の古墳状隆起の調査を実施したが、いずれも古墳ではないと判断した。

(石崎善久)

32. ながおききょうあとうきょうだい^じ 長岡京跡右京第635次(7ANKNZ-10)

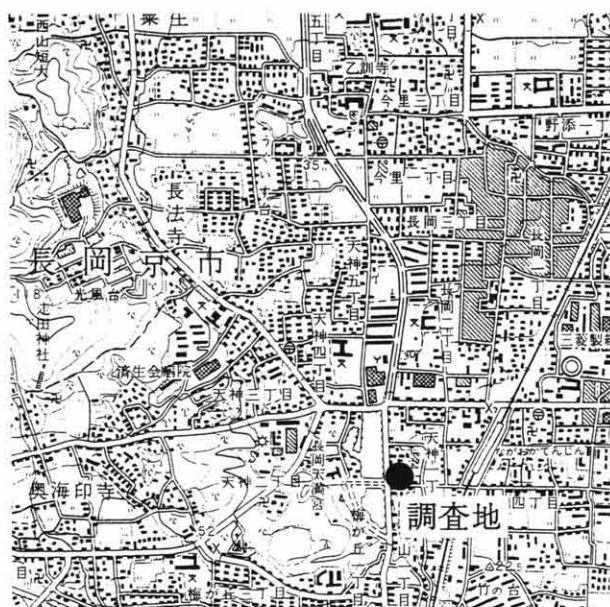
所在地 長岡京市天神1丁目地内
 調査期間 平成11年5月20日～7月14日
 調査面積 約280m²

はじめに 今回の調査は、府道石見下海印寺線の拡幅に伴う事前調査で、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。

調査地は、長岡京跡右京六条三坊七町(旧右京五条三坊五町)・六条条間小路(旧五条大路)および開田城ノ内遺跡にあたり、六条条間小路北側溝の検出が予想された。

調査概要 基本層序は、上から宅地造成に伴う盛り土、水田耕作土、地山(黄褐色粘質土)の順である。調査地南側約3分の1については、水田開削時に遺構面が削平されていた。段差は、宅地造成以前の水田の畦界と一致する。遺構はすべて地山上面で検出し、調査の結果、古墳時代および長岡京期から平安時代の遺構を確認することができた。以下時代を追って主な遺構・遺物の説明をしていく。

古墳時代の遺構には、竪穴式住居跡2基と溝状遺構がある。竪穴式住居跡のうち1基は平面形が隅丸長方形で、支柱は2本ある。建て替えが1回行われており、古い住居の規模は一辺約4.1m×5.0mで深さ約15cm、新しい住居は一辺約4.3m×5.3mで深さ約25cmである。古い住居の床面は、北西側で地山を畳一畳分掘り残している。新しい住居は全体に周壁溝1本分(約0.1m)拡



第1図 調査地位置図(1/25,000)

張したもので、古い床面上に炭混じりの土を敷き詰めてその上を新たな床面として使用している。中央やや西よりはには炉があったことをうかがわせる焼土が薄く堆積している。周壁溝の埋土から古墳時代の土師器甕が出土した。もう1基の竪穴式住居跡は北西隅部分のみ確認した。本体は調査地外に続く。同じく古墳時代前期のものと思われる。

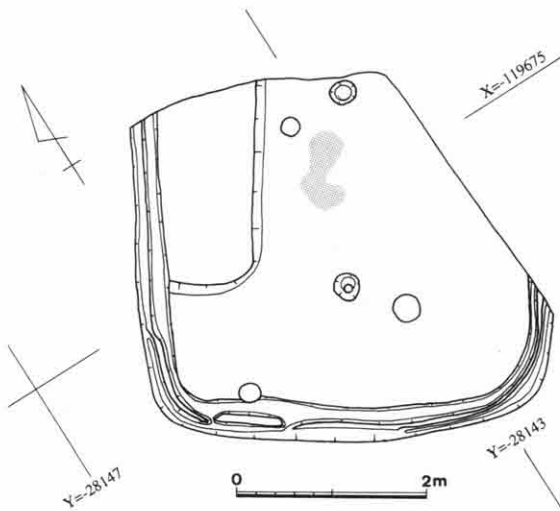
溝状遺構は北西から南東方向に走る遺構で、南側は調査地外へ続く。幅1.6～2m・長さ約6.5m分を検出した。遺構は南に向かって深くなり、南壁で深さ約1.8mを測る。なお、北側3分の1は井戸状に深く掘り窪めら

れており、深さ約1.5mを測る。埋土は大きく3層に分けることができ、上層は炭・土器を多量に含む粘土層、中層は薄い粘土の互層、下層は北側3分の1が木の葉の堆積層で南側3分の2は砂礫層である。上層から出土した遺物の年代は古墳時代前期である。



調査地全景(北から)

平安時代の遺構には掘立柱建物跡2棟と土坑がある。掘立柱建物跡はいずれも総柱の建物で、2間×2間分を確認したが調査地外へ続く可能性がある。柱穴はいずれも小規模で直径0.2~0.3mを測る。柱穴から出土した遺物の時期は平安時代で、瓦器などの新しい時期の遺物が含まれていない。このことから、現段階では平安時代の建物と考える。また、柱穴の一つから平安時代中期の軒平瓦が1点出土した。土坑は、平面形が中央で少しくびれる楕円形で、長辺約1.2m・短辺約0.5m・深さ約0.5mを測る。最上層で土師器皿がまとまって出土した。10世紀代のものと考えられる。



第2図 竪穴式住居跡実測図

その他L字に並ぶ長辺0.5~0.6mの隅丸方形の柱穴を3つ確認した。そのうち1つの柱穴には礎板として底に薄い板状のものが3・4枚重ねて敷いてあり、長岡京期から平安時代前期の遺物が出土した。



第3図 出土軒平瓦拓本

出土遺物には、古墳時代前期の土師器、長岡京期から平安時代前期の土師器・須恵器・道具瓦、平安時代中期の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・無釉陶器・軒平瓦などの他、剝片(チャート)がある。

まとめ 今回の調査では、当初、六条条間小路の北側溝の検出を目的としたが、遺構面の残っている範囲内では確認されなかった。しかし、古墳時代および平安時代についてそれぞれ成果を得ることができた。古墳時代の竪穴式住居跡は右京第447次調査で確認された古墳時代の集落の一部を構成する可能性があり、集落の範囲を検討する上で重要な資料を追加したといえる。また、平安時代の遺構および軒平瓦の存在は、都が平安京に移った後の土地利用の状況、特に開田院との関係を考える上で興味深い。

(松尾史子)

資料紹介

あさごだにみなみいせき 浅後谷南遺跡出土の滑石製刀子

石崎 善久

1. はじめに

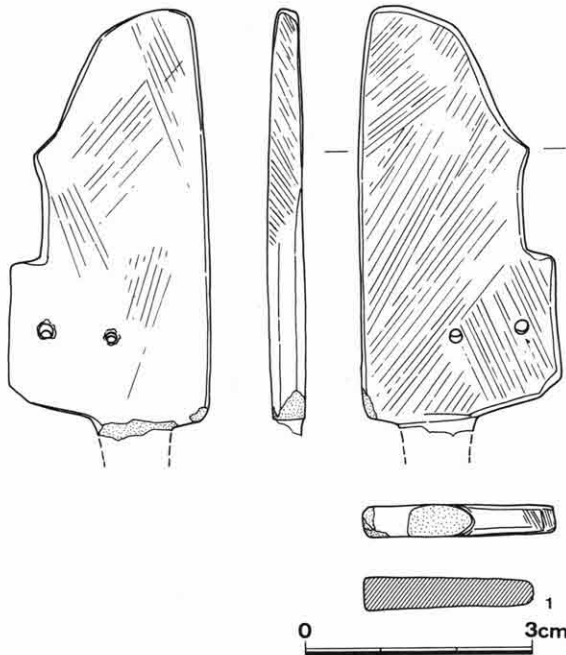
今回、紹介する資料は、平成9・10年度に当調査研究センターで調査を実施した京都府竹野郡網野町字公庄に所在する浅後谷南遺跡から出土した滑石製刀子である。

遺跡の概要についてはすでに『京都府埋蔵文化財情報』第68号・71号で紹介しているため詳述はさけるが、弥生時代中期～中世にかけての複合遺跡であり、中でも、古墳時代前期の溝から検出された浄水施設は他地域の出土例とあわせて注目を集めることとなった。

現在、整理作業を進行中であり、未だ遺物の全容もつかめていない状況ではあるが、今回報告する滑石製刀子は丹後半島では初めての出土例であり、共伴遺物も比較的明確であるため資料的価値が高いと判断し、この場を借りて紹介させていただくこととした。

2. 検出状況

調査区南側に位置する竪穴式住居跡S H01の北東隅床面付近から検出された。周囲からは多くの完形に近い土器が確認され、住居廃絶時に一括廃棄されたものと考えられる。また、少量ではあるが焼土も検出しており、2次的な被熱が観察される土師器も存在する。

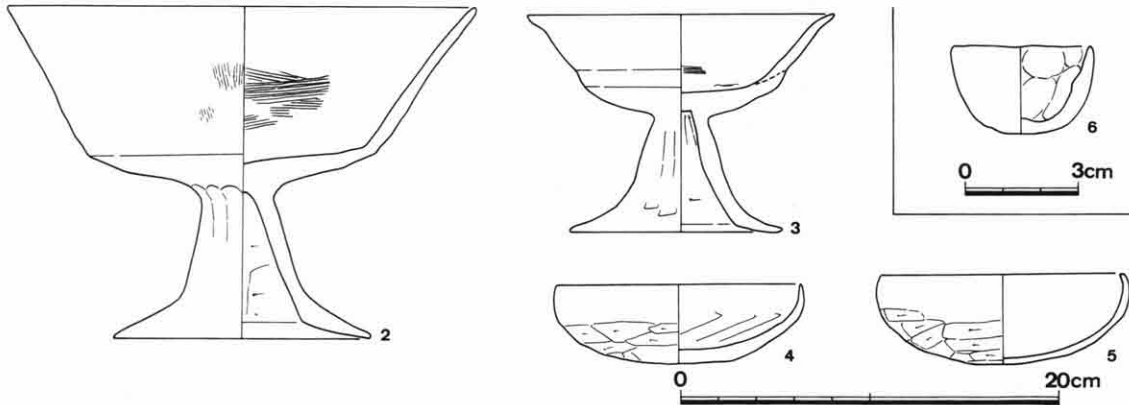


第1図 滑石製刀子実測図(1/1)

3. 遺物

滑石製刀子と共伴した土師器を図示した。なお、図示したものが出土遺物の全てではなく、さらに複数個体の土師器・内面スリ消しを行った須恵器甕も共伴している。

1は滑石製刀子である。残存長5.6cm・幅2.6cm・最大厚0.45cmを測る。なお、峰部分より刃部の方が若干薄く仕上げられている。その形態から革袋に納められた刀子を模したものと判断されるが、革を綴じるような表現はなされていない。穿孔は長軸に対し、直交する形で2か所認められる。両者とも片面穿孔である。茎部分は不注意にも調査時に欠損



第2図 滑石製刀子に共伴した土器実測図(1/4)

してしまい失われているが、破断面から刃部は丸く、峰部は直線的に仕上げられていたものと判断される。全体に研磨痕が残されている。

2・3は土師器高杯である。2は口径24.6cmを測る大型品である。杯部は直線的に立ち上がる。全体的に角張ったプロポーションを呈する。内面は横方向のハケ調整である。3は、2に比べると口径16cmと小型である。脚部の形態は両者とも共通する。

4・5は土師器杯である。浅い椀状を呈し、口縁部は内湾する。両者とも底部外面はヘラケズリにより仕上げられる。4は内面に板状工具による調整痕が認められる。5は口径12.6cm・器高4.7cm、4は口径12.8cm・器高4.2cmを測る。

6は土師器ミニチュア土器である。同様の形態のものが少なくとももう1個体存在する。内面は指押さえ、外面はナデにより調整されている。口径3.6cm・器高2.3cmを測る。

4. 小結

以上、浅後谷南遺跡出土の滑石製刀子と共伴遺物について概観した。廃棄の年代は土師器の年代観および内面スリ消しの須恵器甕が伴っているのでTK23・TK47型式併行期と考える。

共伴する遺物中にミニチュア土器が2個体以上含まれることから見ても、この住居に伴う祭祀に関係する遺物として考えることができる。なかでも、2次的な被熱の観察される個体が存在する点は、祭祀に際し、火が用いられていたことを示唆している。ただし、これが住居使用時の祭祀か、住居廃絶時の祭祀かという判断はできない。

丹後半島における、滑石製模造品の出土状況を見てみると、古墳出土例(滑石製玉類・剣形・合子形)の他、集落出土例として定山遺跡の鍛冶炉に伴う有孔円板ぐらしか例示できない。その他のものは大部分が包含層出土として報告され、滑石製玉類が大部分を占めている。その中で、今回出土の滑石製刀子は、共伴遺物が明らかな点、出土状況が明らかな点、従来は滑石製刀子の分布の空白地点であった丹後半島を分布域に含めることができた点などが評価される。

(いしざき・よしひさ＝調査第2課調査第1係調査員)

研 修 報 告

石 寨 山 滇 国 墓 地 の ク ラ ス タ ー 分 析

河野 一隆

1. 滇国の概要

雲南省の省都、昆明市の南東郊外に広がる滇池(昆明湖)のほとりに、晋寧石寨山遺跡が位置する。これは、1966年に雲南省文物管理局によって発掘調査が実施され、「滇王之印」金印をはじめとする豊富な副葬品を有した滇王国の墓地が判明した。この成果によって、戦国時代後期から前漢時代にかけて独特の青銅文化を生み出した、滇族の中核の1つであることが明らかとなった。石寨山遺跡は、現在までに5次にわたる発掘調査が実施され、700基以上の墓の存在が明らかとなっている。それにより、滇の文化は、漢の文化的影響を受けつつも、南方のドンソン文化、東南の南越文化、北方の四川盆地を經由して流入した遊牧騎馬民族系文化などが流入し、融合して形成されたことが確認されている。また、王宮は判明していないが、滇族は、滇池南方に広がる水稻農耕に生業基盤をおき、丘陵頂部や尾根上に多量の青銅器を副葬した墓地を造営したことで知られており、昆明上馬村遺跡、呈貢天子廟遺跡、江川李家山遺跡などが名高い。また、金印や弥生時代中期の大型掘立柱建物跡に見られる独立棟持柱が石寨山遺跡出土貯貝器の蓋の装飾に見られるなど、日本列島の研究者が注目する地域の1つでもある。

滇族の青銅文化は4期に分けられるが、滇Ⅲ期(前漢前・中期)に大きな転機を迎えた。滇Ⅱ期(戦国後期)から青銅器の増加傾向は顕著に認められたが、滇Ⅲ期に至って中原からの影響が強まる。その背景には、前漢帝国の領域拡大による滇族の漢化と捉えられるが、直接には、武帝の西南夷遠征によって、元封二(B.C. 109)年に益州郡が設置され、漢の直轄領化したことと無関係ではないと考えられている。それと呼応して、「滇王之印」蛇紐金印や内行花文星雲鏡や五銖銭、さらには鉄器が登場する。さらに、滇Ⅳ期になると、中原と共通した文物の出土が顕著となり、滇独特の青銅文化は終焉する。

2. 分析作業

晋寧石寨山遺跡は比高差30m程度であり、南側は急傾斜で北側は緩傾斜となる低平な独立丘陵である。あたかも鯨が伏したようにも見えるので、「鯨魚山」という別名もある。その北側斜面のほぼ中腹に、王墓が営まれている。

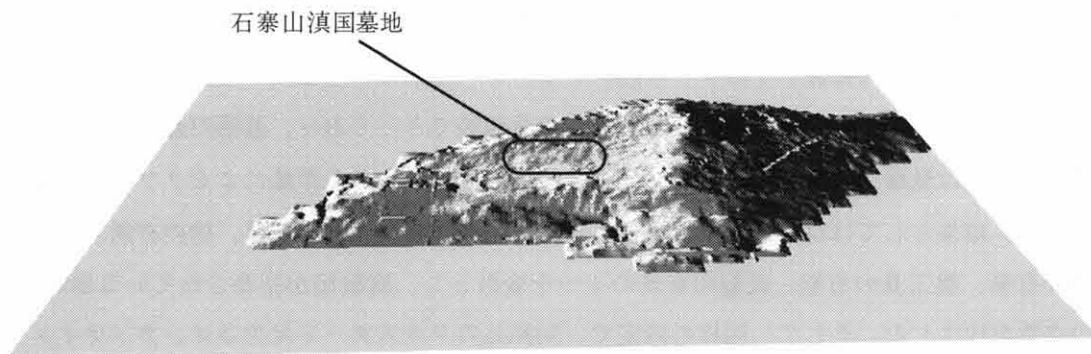


第1図 石寨山遺跡近景

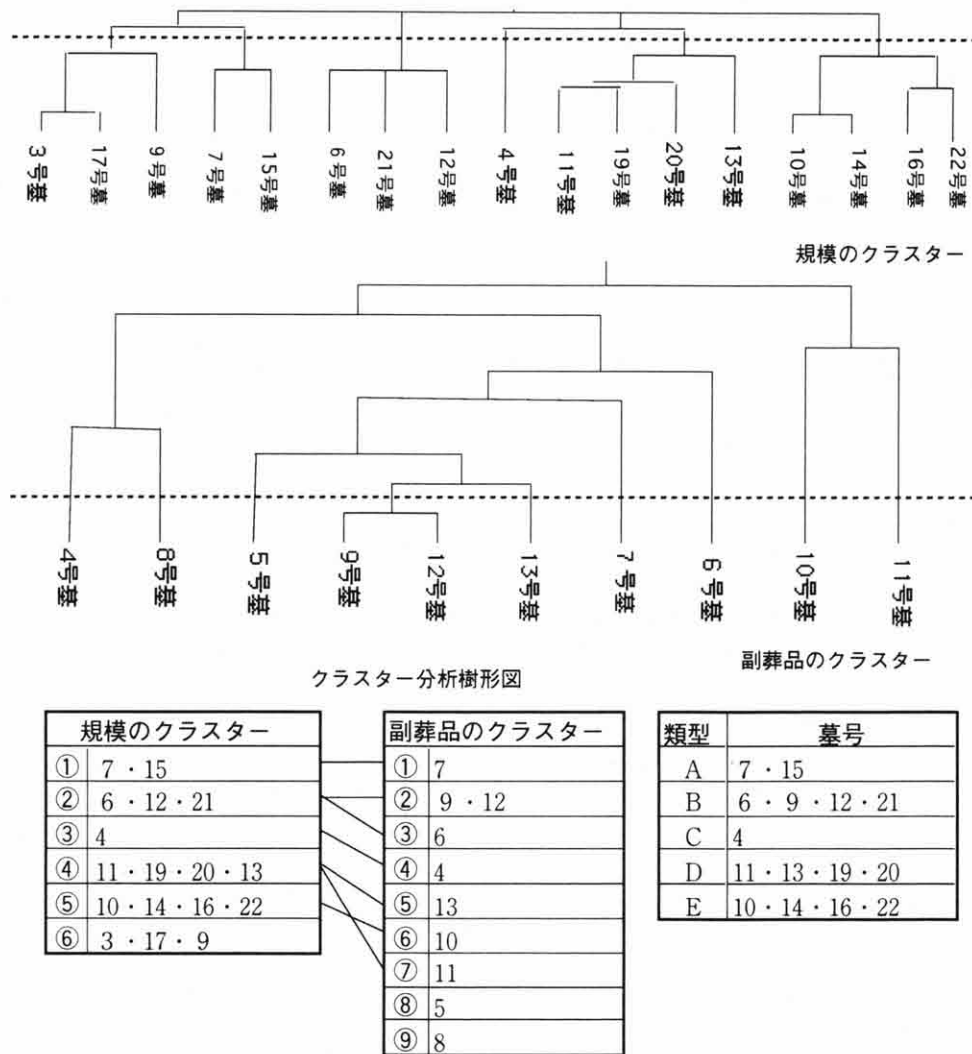
る。5次にわたる石寨山遺跡の発掘調査で、王墓が検出されたのは第2次調査であり、雲南省博物館から『雲南晋寧石寨山』という発掘報告書が刊行されている。そこには、総数22基の墓葬が記録されており、遺構・遺物のカタログとしても非常に有用である。その主な概要を第1表に示した。石寨山滇国墓地の特徴は、木棺に黒漆を塗布したものがあり、副葬品としては貯貝器・銅鼓・農工具・武器などが認められる。また、墳丘を持つものはなく、岩盤の間の窪地に木棺を納める埋葬法をとっている。それらを報告書では、時期と内容に基づいて、I～IVの4つの類型に

第1表 石寨山滇国墓地の要素表

墓号	主軸	棺	主な副葬品	時期	類型
14号墓	東西	なし	銅鼓・貯貝器・銅尊・銅案・銅牛・銅杖頭・玉杯	前漢前期	I
15号墓	東西	なし	銅鼓・貯貝器・銅鈴・銅斧・銅案・玉耳杯・玉杯	前漢前期	I
16号墓	東西	なし	銅鼓・貯貝器・銅傭・銅案・銅鈴・虎形装飾品	前漢前期	I
17号墓	東西	なし	銅鼓・貯貝器・銅傭・銅劍・銅矛・銅牛頭・玉釧	前漢前期	I
3号墓	東西	漆棺	銅鼓・貯貝器・銅柄鉄劍・銅柄鉄矛・銅鎌・馬具	前漢中期	II
10号墓	東西	漆棺	銅鼓・貯貝器・銅鋤・銅矛・銅劍・鉄劍・玉杯	前漢中期	II
11号墓	東西	なし	銅鼓・貯貝器・銅劍・銅劍・玉釧・玉耳杯	前漢中期	II
12号墓	東西	漆棺	貯貝器・殺人祭銅柱貯貝器・アキナケス短劍鞘	前漢中期	II
13号墓	東西	漆棺	銅鼓・戦争場面貯貝器・金鞘銅劍・鉄劍・矛	前漢中期	II
18号墓	東西	なし	貯貝器・銅傭・銅牛頭・金飾	前漢中期	II
19号墓	東西	なし	銅劍・銅釧・金飾・玉耳杯	前漢中期	II
20号墓	東西	なし	殺人祭祀貯貝器・銅鋤・銅劍・金釧・玉杯	前漢中期	II
21号墓	東西	漆棺	銅劍・銅柄鉄劍・銅矛・銅斧・銅牛・玉杯	前漢中期	II
22号墓	東西	漆棺	貯貝器・銅劍・銅矛・銅鈴・銅鏃	前漢中期	II
4号墓	東西	なし	銅鋤・銅劍・銅矛・銅斧・人物動物紋装飾	前漢中期	III
5号墓	不明	なし	銅劍・銅柄鉄劍・銅矛・銅斧・円形装飾	前漢中期	III
6号墓	東西	漆棺	金印・貯貝器・銅傭・編鐘・銅洗・蓋弓帽	前漢中期	III
7号墓	東西	漆棺	貯貝器・銅鎌・銅柄鉄劍・銅斧・人物動物紋装飾	前漢中期	III
8号墓	東西	なし	銅矛・銅五 銭・鉄小刀	前漢後期	IV
9号墓	東西	なし	銅矛・銅斧・銅	前漢後期	IV



第2図 晋寧石寨山遺跡の鳥瞰図と王墓の位置

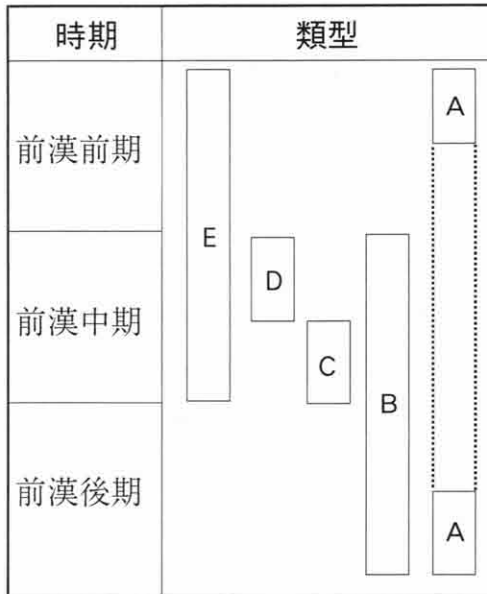


クラスター分析結果に基づく墓葬の類型化

第3図 石寨山滇国墓地のクラスター分析

まとめられている。今回の分析では、多変量解析の一つである、クラスター分析を実施した。その方法は以下の通りである。

まず、報告書記載の墓葬を、長辺側を長さ、短辺側を幅として、統計・表計算用ソフトウェアに代入し、クラスター分析を実施した。その結果が、第3図上段に示した規模のクラスターである。その設定は、目的変数クラスターの無いクラスター分析で、項目間の距離はマハラノビス汎距離で行った。この場合、各項目の変数は実際の計測値でっており、遺構の遺存状況に左右される計測誤差は見積もっていない。なお、各計測値の平均値からの距離によるクラスター分析も試みたが、結果としてはほぼ同一であった。一方、副葬品のクラスターは、棺の有無、貯貝器・銅鼓の有無、農工具の有無、武器の有無の4つを変数とし、複数個が副葬されている場合には、その点数を代入した。そして、同様の設定で、副葬品のクラスターを発生させ、カットニング線を上下させて、規模と副葬品の双方のクラスターが最も適合する位置に設定する。そして、規模で①～⑥のクラスター、副葬品で①～⑧のクラスターが分離できたので、次に墓葬が共通するも



第4図 石寨山墓地の類型

のを組み合わせて、A～Eの類型をまとめる。

その次の作業として、A～Eの5類型が、階層的にいかなる関係にあるかを議論するために、時間軸を縦軸にとって、類型の併行関係を示したが、第4図である。

3. まとめ

以上の作業によって、前漢中期が最も墓葬のクラスターが多様であり、前漢前期・後期は少ないことである。墓葬のクラスターの増減が、すなわち社会の階層を示すと仮定するならば、前漢中期こそ石寨山滇国墓地では、最も階層分化が進行し、王を析出するほどの集団の分節化が達成されたの

ではないか？本稿のA～Dのクラスターのうち、最も上位に位置するものは、Bのクラスターである。それが、前漢後期にも一部認められることは、益州郡設置以後の滇国が、漢の直轄領とはいっても、在地勢力であった滇王を介した間接支配を行っていた可能性を示唆している。

なお、滇国の歴史を描くためには、石寨山の滇国墓地の分析のみでは不十分で、江川李家山遺跡、呈貢天子廟遺跡をはじめとした、他遺跡の分析や、墓層資料以外の遺物の分析も必要なこととは言うまでもない。本稿は、それらの必要性を理解した上で、あえて多変量解析という手法のみで石寨山墓地のクラスター分析を試みたものである。

付記 本稿執筆の動機は、1998年11月7日～14日に全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック海外研修で、石寨山遺跡を訪れたことである。研修中は、青木 功団長((財)大阪府文化財研究センター)をはじめ、同行諸氏に大変お世話になった。また、中国の研究者の方々とも親しく交流し、大変感銘を受けた。末尾ではあるが、記して感謝の意を表したい。

(かわの・かずたか=調査第1課資料係調査員)

府内遺跡紹介

85. げしこふんぐん
下司古墳群

遺跡の概要 南山城地域は、竹林が生い茂る静かな竹林が形成されている。京田辺市の普賢寺谷も、そのような景観の一つであるが、近年、関西学研都市の開発によって、大学・研究所の移転により、大きな変貌を見せはじめている。現在、同志社大学田辺校地の敷地内にも、マムシ谷窯跡や下司古墳群など、多くの遺跡が眠っており、移転工事に先立って、同志社大学校地学術調査委員会により、発掘調査が実施された。特に、下司古墳群は、現在も大学構内に石室が開口した状態で保存され、近接した府道沿いにも「下司古墳」と刻まれた石柱が樹立されている。

この地域は、天平16(744)年に創建されたと伝えられる普賢寺、ならびに天武朝創建の親山寺、白鳳期の瓦を出土する興戸廃寺・三山木廃寺などがあり、古代寺院跡の集中した地域として、知られている。その造営氏族をさぐる上で、古墳時代後期の古墳群の動向は非常に注目されるが、南山城地域の群集墳の調査は、さほど進んではない。下司古墳群および大御堂裏山古墳は、木津川西岸の実体が判明した後期古墳の数少ない例と言える。

これらの古墳は明治時代から知られており、『山城綴喜郡誌』には、すでに記録されている。次いで、昭和初期の『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』には、佐藤虎雄氏によって、下司1号墳が開口して露出し、付近に数基の古墳が存在したことが知られている。1963年、京都府教育委員会によって、「普賢寺所在古墳」として、下司1～3号墳の発掘調査が実施され、概略が報告されたが、本格的な調査は、1983年からの同志社大学田辺校地造成に先立つ発掘調査からである。

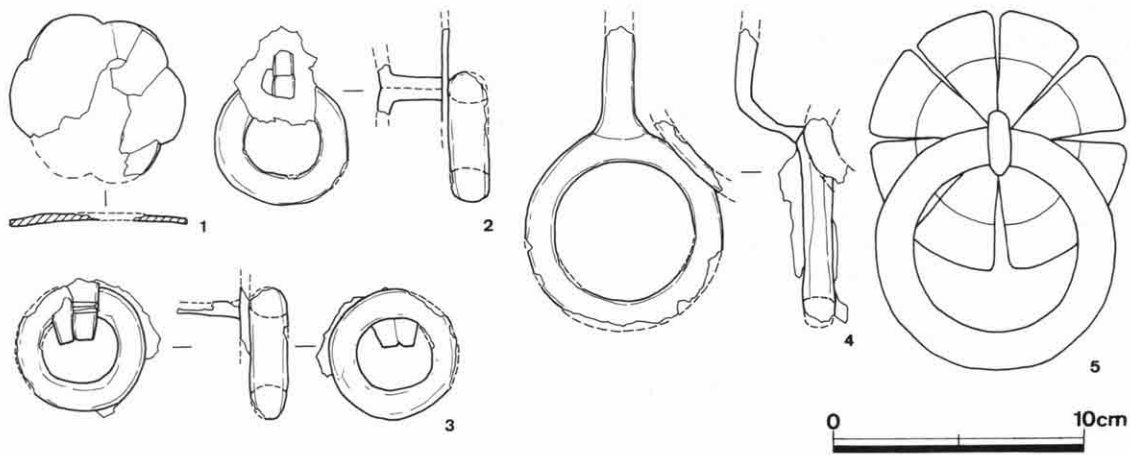
下司古墳群は、南向きの丘陵斜面に横穴式石室を築く、8基からなる古墳群である。最大規模の古墳は1号墳で、石室の長さ8.5m・玄室長3.5m・奥壁幅2.1mを測る。石室の石積みは、大型の石材を横積みした典型的な後期後半の石室で、内部には陶棺と、追葬者の木棺が納められ、



第1図 古墳の位置(1/25,000)

若干の須恵器が出土した。また、2号墳は、石室全長2.8mの両袖式の横穴式石室を内部主体とするが、石積みや石室の形態は1号墳に先行するようである。また、3・5・6号墳も須恵器・土師器などの土器類や釘などが出土したが、副葬品量が少ないのは、終末期の群集墳の特質をよく表している。この古墳群の造営時期は、7世紀前葉～中葉であり、追葬は8世紀前葉まで継続する。

遺跡の意義 この古墳群を特徴づける遺物が、2号墳から出土した鍔座金具である。鍔座金具とは、可動性のある鍔を、足金具で取り付けしたもの



第2図 鑲座金具の例

(1～4：下司2号墳 5：百済武寧王陵王妃棺)

で、日本列島では50例前後の出土例が見られる。その用途は、木棺に装着された金具かまたは、馬具の革金具として使用されている。ただし、この鑲座金具は、朝鮮半島や中国大陆での出土例が多く、そこでは棺以外にも門扉の把手などに使用されている。元来、中国では、戦国時代以来、鋪首と呼ばれる、獣(牛や羊など)をモチーフとした座金具に、円環を取り付けたものがある。朝鮮半島でも新羅地域で、鬼面のモチーフを座金具として、円環を有する鑲座金具が認められるが、その主流となるものは、円形ないしは花形の座金具を持った鑲座金具である。特に、百済地域では、523年に没した武寧王とその王妃に用いられている。ところで、日本の横穴式石室の源流は、形態の類似から百済地域であると考えられており、木棺も百済地域の墓制と何らかの関連があることが推定されている。近年、話題となった、山城町上狛天竺堂古墳も、百済の横穴式石室との関連が指摘されている。つまり、6世紀中葉以後、百済と倭国の交渉が活発化するに伴い、鑲座金具も木棺に装着される金具として、渡来人とともに日本列島に伝えられたのではなかろうか。

南山城地域では、近年、上狛天竺堂古墳をはじめ、精華町森垣内遺跡などで、古墳時代の渡来人に関わる遺跡が発掘調査によって次第に判明してきている。下司古墳群は古くからその存在が知られていたが、地域研究の進んだ現在の立場から、もう一度、この鑲座金具を見直してみる必要がある。

遺跡の案内 近鉄京都線興戸駅あるいはJR学研都市線同志社前駅から徒歩20分。同志社大学田辺校地内に石室が開口した状態で保存されている。

(河野一隆)

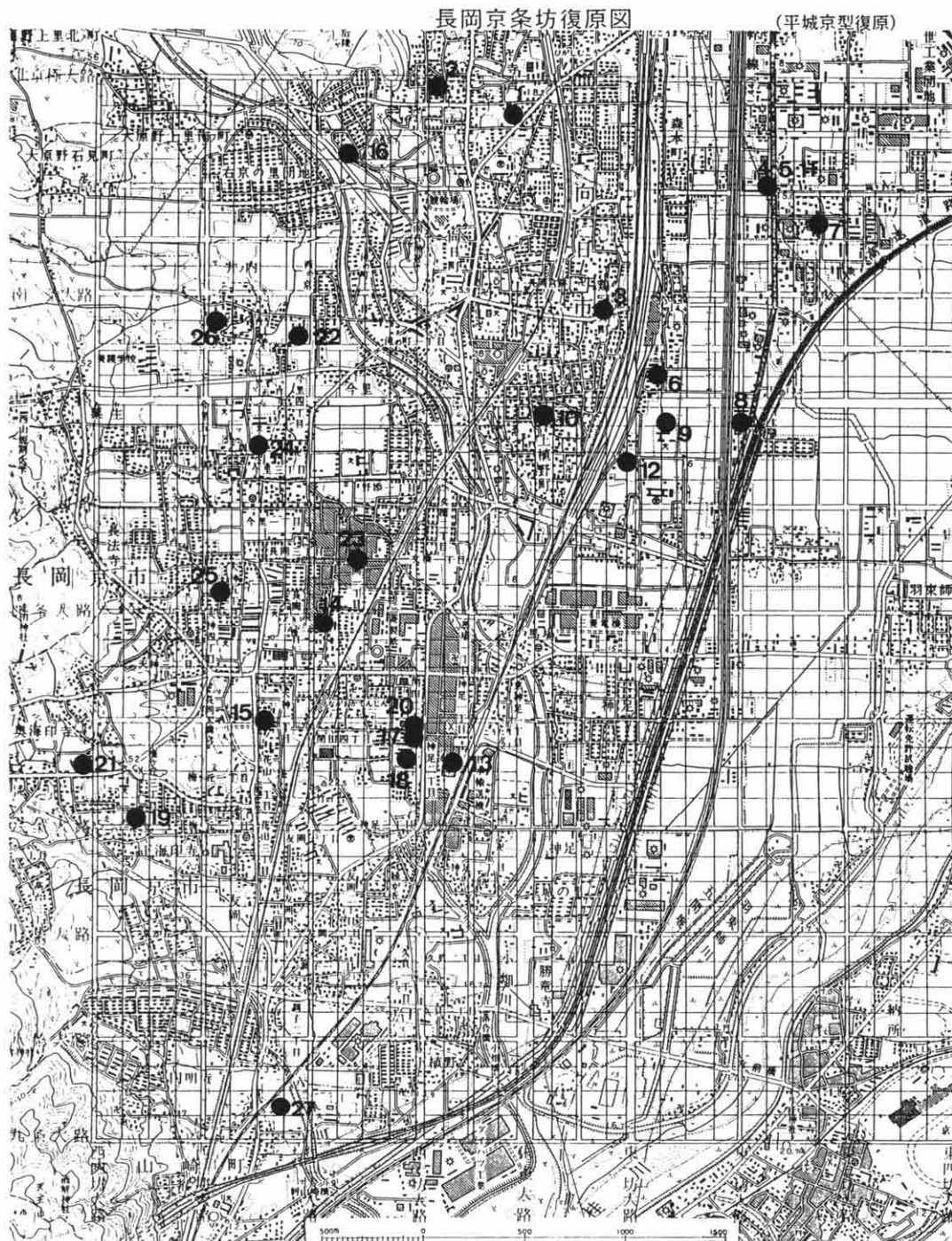
長岡京跡調査だより・70

前回の『たより』以降の長岡京連絡協議会は、平成11年5月26日、6月23日、7月28日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は、宮内3件、左京域9件、右京域15件であった。京外の4件を併せると31件となる(位置図を参照)。

調査地一覧表(1999年7月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第380次	7ANBDC-2	向日市寺戸町殿長31番10	(財)向日市埋文	4/26~5/21
2	宮内第381次	7ANBNI-4	向日市寺戸町西垣内8	(財)向日市埋文	6/14~6/23
3	宮内第382次	7ANEHI-2	向日市鶏冠井町東井戸67	(財)向日市埋文	6/23~7/2
4	左京第421次 第2調査区	7ANDTD-3	向日市森本町佃22他	(財)向日市埋文	3/9~5/14
5	左京第421次 第3調査区	7ANDTD-3	向日市森本町佃22他	(財)向日市埋文	2/2~4/30
6	左京第425次	7ANEKS-3	向日市鶏冠井町草田29-3	(財)向日市埋文	4/7~4/26
7	左京第426次	7ANVKC-2	京都市南区東土川町178他	(財)京都市埋文研	4/15~
8	左京第428次	7ANEKZ-10	向日市鶏冠井町清水7-1の一部	(財)向日市埋文	5/10~6/9
9	左京第429次	7ANEKS-4	向日市鶏冠井町草田29-3	(財)向日市埋文	5/12~6/11
10	左京第430次	7ANFKZ-4	向日市上植野町北小路40	(財)向日市埋文	6/2~6/14
11	左京第431次	7ANDTD-4	向日市森本町佃4-1.5.7	(財)向日市埋文	6/8~7/9
12	左京第432次	7ANFKD-4	向日市上植野町北ノ田5-1.6	(財)向日市埋文	7/6~8/5
13	右京第630次	7ANMBZ-2	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	1/27~7/24
14	右京第633次	7ANKSN-6	長岡京市長岡二丁目407他	(財)長岡京市埋文	3/15~5/6
15	右京第635次	7ANKNZ-10	長岡京市天神1丁目地内	(財)京都府埋文	5/20~7/15
16	右京第637次	7ANBOK-2	向日市寺戸町大牧2	(財)向日市埋文	4/12~6/12
17	右京第638次	7ANMHK-2	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	4/26~6/24
18	右京第639次	7ANMHK-3	長岡京市神足三丁目地内	(財)長岡京市埋文	5/13~6/22
19	右京第640次	7ANOJH-3	長岡京市下海印寺北条23.24	(財)長岡京市埋文	5/12~6/15
20	右京第641次	7ANKSM-9	長岡京市開田一丁目10-1. 10-30	(財)長岡京市埋文	5/17~7/10
21	右京第642次	7ANPND-1	長岡京市奥海印寺野辺田6-1	(財)長岡京市埋文	5/19~6/13
22	右京第643次	7ANGSN-5	長岡京市井ノ内下印田 24.24-28	(財)長岡京市埋文	6/14~7/18
23	右京第644次	7ANKYD-2	長岡京市長岡一丁目78	(財)長岡京市埋文	6/15~6/16
24	右京第645次	7ANIHR-5	長岡京市今里四丁目5-10	(財)長岡京市埋文	7/5~7/21
25	右京第646次	7ANIOK-3	長岡京市天神五丁目108	(財)長岡京市埋文	7/19~8/31
26	右京第647次	7ANGMB-1	長岡京市井ノ内向井芝4	(財)長岡京市埋文	7/19~8/31

27	右京第648次	7ANQKK-4	長岡京市久貝一丁目301-1	(財)長岡京市埋文	7/21~8/23
28	中久世遺跡		京都市南区久世中久世町4-37	(財)京都市埋文研	7/21~
29	山城国府跡 第49次	7YYMS' NT-5	大山崎町字大山崎小字西谷2-5	大山崎町教委	4/27~5/14
30	山城国府跡 第55次	7YYMS' RK-16	大山崎町字大山崎小字竜光51-1	大山崎町教委	7/5~
31	山城国府跡 第54次	7XYS' UD-4	大山崎町大山崎上の田11	大山崎町教委	4/1~7/30



センターの動向(99. 5～7)

1. できごと
5. 6 木津城山遺跡(木津町)発掘調査開始
- 10 森垣外遺跡(精華町)発掘調査開始
- 11 墓ノ谷古墳群(弥栄町)発掘調査開始
- 五十河遺跡(大宮町)発掘調査開始
- 13～14 全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会(於：甲府市)木村常務理事・事務局長、福嶋事務局次長、安田主幹出席
- 14 市田斉当坊遺跡(久御山町)発掘調査開始
- 17 職員研修(於：当センター)講師：平良課長「日本海域の古墳」
- 三山木遺跡(京田辺市)発掘調査開始
- 18 吉沢城跡(弥栄町)発掘調査開始
- 20 長岡京跡右京第635次調査(長岡京市)発掘調査開始
- 21 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於：長岡京市)木村常務理事・事務局長、福嶋事務局次長、安田主幹出席
- 24 今井城跡・赤坂今井墳丘墓(峰山町)発掘調査開始
- 太田遺跡(亀岡市)発掘調査開始
- 26 長岡京連絡協議会
- 28 墓ノ谷古墳群発掘調査終了(5.11～)
- 6.10～11 全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会(於：山形市)木村常務理事・事務局長、福嶋事務局次長、安田主幹出席
- 11 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックOA委員会(於：長岡京市)河野・福島調査員出席
- 14～15 監事監査
- 16～18 京都府新任係長研修、平良課長出席
- 18 京都府開庁記念日記念式典(於：府民ホール)木村常務理事・事務局長出席
- 職員研修(於：当センター)講師：中川調査員「京都府内における銅剣形石剣の出土とその背景」
- 6.22 第56回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事・事務局長、上田正昭、都出比呂志、中村 彰、土山喜英、中谷雅治各理事、京極隆夫監事出席
- 6.23 長岡京連絡協議会(於：当センター)
7. 2 長岡京跡右京第635次調査(長岡京市)関係者説明会
7. 7 稲葉遺跡(京田辺市)発掘調査開始
7. 8 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主催者会議(於：京都市)平良泰久調査第2課長・伊野近富企画係長出席
7. 9 木村英男常務理事・事務局長、下

植野南遺跡現地視察

国際協力事業団文化財修復整備技術コース閉講式(於：茨木市)小山雅人調査第1課長出席

7.12 木村英男常務理事・事務局長、市田斉当坊遺跡現地視察

7.14 長岡京跡右京第635次発掘調査終了(5.20～)

算用田遺跡(大山崎町)発掘調査開始

7.15 埋蔵文化財調査支援機器の開発に関する研究会(於：大阪市)平良泰久調査第2課長出席

7.16 職員研修(於：当センター)講師：川田 貢京都府向日町警察署交通課交通総務係長「交通安全」

7.22 東山遺跡(京北町)発掘調査開始

7.26 川上 貢理事、平安京跡右京一条三坊(京都市北区)現地視察

7.27 福知山城跡(福知山市)発掘調査開始

7.28 長岡京連絡協議会(於：当センター)

2. 普及啓発活動

6.26 第85回埋蔵文化財セミナー(於：八木町立中央公民館)『古代、太邇波の謎』：黒坪一樹主査調査員「浅後谷南遺跡の掘調査について」、谷口悌八木町教育委員会主査「池上遺跡の発掘調査について」、欄亘田佳男大阪府教育委員会技師「2000年前の畿内と太邇波」

(小山雅人)

受贈図書一覧(11.5～7)

苫小牧市埋蔵文化財調査センター

所報1

青森県埋蔵文化財調査センター

青森県埋蔵文化財調査報告書第253集 下馬坂遺跡、同第254集 戸沢遺跡、同第255集 安田(2)遺跡、同第256集 新納屋(1)遺跡、同第257集 三内丸山(6)遺跡Ⅰ、同第258集 山下遺跡・上野尻遺跡、同第259集 野尻(1)遺跡Ⅱ、同第260集 隠川(11)遺跡Ⅰ・隠川(12)遺跡Ⅱ、同第261集 十腰内(1)遺跡、同第262集 畑内遺跡Ⅴ、同第263集 櫛引遺跡、同第264集 野木遺跡Ⅱ、研究紀要第4号

(財)いわき市教育文化事業団

いわき市埋蔵文化財調査報告書第56冊 連郷遺跡、同第57冊 五反田A遺跡、同第58冊 白岩堀ノ内館跡、同第59冊 小茶円遺跡・上ノ内遺跡、同第60冊 屋敷前遺跡、同第62冊 滝ノ作遺跡、同第64冊 大場C遺跡

(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社

(財)ひたちなか市文化・スポーツ振興公社文化財調査報告第18集 船窪Ⅱ

(財)鹿嶋市文化スポーツ振興事業団

鹿嶋市の文化財第72集 鹿島神宮駅北部埋蔵文化財調査報告書Ⅷ、同第105集 鹿嶋市内遺跡発掘調査報告書19、同第106集 鹿嶋市内遺跡発掘調査報告書20

栃木県埋蔵文化財センター

栃木県埋蔵文化財調査報告第197集 藤岡遺跡、同第216集 山崎北・金沢・台耕上・関口遺跡、同第220集 下野国分寺跡XⅣ、同第223集 台畑遺跡・谷向遺跡、同第226集 清六Ⅲ遺跡Ⅰ、同第227集 清六Ⅲ遺跡Ⅲ、同第228集 清六Ⅲ遺跡Ⅳ

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第227集 南蛇井増光寺遺跡Ⅵ、同第238集 浜川遺跡群、同第239集 下東西清水上遺跡、同第243集 荒砥上ノ坊遺跡Ⅳ、同第246集 三和工業団地Ⅰ遺跡(1)、同第248集 下植田壱町田遺跡、同第249集 荒砥下押切Ⅱ遺跡・荒砥中屋敷Ⅱ遺跡、同第251集 三和工業団地Ⅰ遺跡(2)、同第252集 高浜広神遺跡、研究紀要16

(財)君津郡市文化財センター

(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第149集 林遺跡Ⅲ、同第150集 豆作台遺跡Ⅰ、同第151集 椿古墳群ⅡⅠ、同第152集 鼓戸古墳、同第153集 夷隅線鉄塔建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書、同第154集 高砂遺跡Ⅱ、年報No.16

(財)東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター

東京都埋蔵文化財センター調査報告同第50集 多摩ニュータウン遺跡、同第59集 多摩ニュータウン遺跡、同第64集 多摩ニュータウン遺跡、同第67集 多摩ニュータウン遺跡、同第69集 多摩ニュータウン遺跡、同第70集 尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅳ、同第71集 多摩ニュータウン遺跡、同第73集 多摩ニュータウン遺跡、研究論集XⅦ、尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅶ、汐留遺跡Ⅶ

(財)かながわ考古学財団

かながわ考古学財団調査報告52 上粕屋・小山遺跡・三ノ下・下御領原遺跡他、同53 下大槻峯遺跡Ⅲ、同54 鉾ノ木遺跡、同55 三ノ宮・下谷戸遺跡Ⅰ、同60 白久保遺跡、同63 釜利谷東6丁目西地区やぐら群・谷津町北地区横穴墓、同64 尾藤谷やぐら群

(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
泉警察遺跡発掘調査報告

(財)長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書37 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書12、同38 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書17、同39 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書18、同40 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書20、同41 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21、同43 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書9、同44 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書8

(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

埋蔵文化財調査概要平成10年度、埋蔵文化財年報10、紀要第2号、発掘調査十年のあゆみ、富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第10集 能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告、勅使塚古墳発掘調査レポート

富山県埋蔵文化財センター

富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ 枅谷南遺跡、富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ 四方北窪遺跡、安養寺遺跡発掘調査報告書Ⅱ、四方荒屋遺跡発掘調査概要、四方背戸割遺跡発掘調査報告書、友杉遺跡・任海宮田遺跡試掘調査概要、富山市HS-07遺跡発掘調査概要、濱黒崎悪地遺跡発掘調査概要、千原崎遺跡発掘調査概要、金屋南遺跡発掘調査報告Ⅰ

(財)石川県埋蔵文化財センター

年報第18号、同第19号、石川県松任市中相川遺跡、佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ、相川新遺跡、扇が丘ゴシヨ遺跡、能美丘陵東遺跡群Ⅲ、木越光琳寺遺跡、金沢市額谷遺跡、下鴛原ナカダン遺跡、矢駄アカメ・イケダ遺跡、東小室ボガヤチ遺跡・東小室キンダ遺跡、猫橋遺跡、金沢市北塚遺跡・北塚古墳群、美岬・千崎B遺跡、軽海

西芳寺遺跡Ⅱ、上町和住下遺跡、ニッ屋遺跡、中島ヤマタン古墳群分布調査報告書、扇台・大額キョウデン遺跡、金沢城跡石川門前土橋発掘調査報告書Ⅱ、鹿西町能登部下仲町遺跡発掘調査報告、鳥屋町一青B遺跡発掘調査報告、金沢市北塚遺跡・北塚古墳群、金沢市北塚遺跡、鹿島町御祖遺跡群、辰口町上徳山谷山西谷窯跡発掘調査報告、石川県埋蔵文化財情報創刊号

金沢市埋蔵文化財センター

金沢市文化財紀要140 上荒屋遺跡Ⅲ、同150 戸水ホコダ遺跡、同151 堅田B遺跡、同152 扇台遺跡・金石本町遺跡・矢木ジワリ遺跡・夕日寺遺跡、同153 下本多町遺跡、同154 磯部カンダ遺跡、同155 平成10年度金沢市埋蔵文化財調査年報、同156 八日市ヤスマル遺跡

(財)岐阜県文化財保護センター

岐阜県文化財保護センター調査報告書第25集 上開田村平遺跡、同第36集 上原遺跡Ⅰ

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

平成10年度年報

(財)滋賀県文化財保護協会

紀要第12号

(財)栗東町文化体育振興事業団

栗東町埋蔵文化財発掘調査 1997年度年報、1980～1982年度 栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集

大津市埋蔵文化財調査センター

大津市埋蔵文化財調査報告29 大津城跡発掘調査報告書

守山市立埋蔵文化財センター

弥生から古墳の守山

(財)大阪府文化財調査研究センター

(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第22集1 宮の前遺跡・蛭池東遺跡他、同第22集2 蛭池遺跡、同第24集2 蔵塚古墳、同第30集 総持寺遺跡、同第36集 小畑遺跡、同第37集 楠木石切場跡、同第39集 中之杜遺跡他発掘調査報告書、同第40集 彩都周辺地域の歴史・文化総合調査報告書、同第42集 吹田操車場遺跡、伏尾遺跡Ⅱ、大阪文化財研究 第14号、発掘!!あおまでに、図書目録(1994年12月27日現在)

(財)大阪市文化財協会

長原・瓜破遺跡発掘調査報告XⅡ、同XⅢ、大坂城跡Ⅳ、細工谷遺跡発掘調査報告書Ⅰ、阿倍野筋遺跡発掘調査報告書、大阪市埋蔵文化財発掘調査報告1996年度、同1997年度、研究紀要第2号

(財)交野市文化財事業団

古代交野と鉄Ⅰ

(財)東大阪市文化財協会

瓜生堂遺跡試掘調査報告書、上小阪遺跡第3次発掘調査報告書、鬼虎川遺跡第35-2・3次発掘調査報告、宮の下遺跡第8次発掘調査報告書、出雲井遺跡第1次発掘調査報告書、客坊山遺跡群第2次発掘調査報告、水走・鬼虎川遺跡発掘

調査報告、岩滝山遺跡第4次発掘調査報告書、岩滝山遺跡第5次発掘調査概要、山畑遺跡第15次発掘調査概要、宮ノ下遺跡第10次発掘調査報告書、若江遺跡第70次・第75次発掘調査報告、概報集1997年度、同1998年度、同1998年度(2)

高槻市立埋蔵文化財調査センター

高槻市文化財年報 平成9年度、高槻市文化財概要XⅩⅤ 嶋上遺跡群23

桜井市立埋蔵文化財センター

桜井市内埋蔵文化財1994年度 発掘調査報告書1、同1996年度 発掘調査報告書2、桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第19集 平成9年度国庫補助事業に伴う発掘調査報告書、同第20集 平成10年度国庫補助事業に伴う発掘調査報告書

(財)和歌山県文化財センター

祈りの考古学、紀州北部の町並み

(財)鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

鳥取県教育文化財団調査報告書59 古市遺跡群1、同60 上管荒神原遺跡、同61 長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第175集 西本3・4号遺跡、同第176集 移原遺跡、同第177集 風呂之元古墳、同第178集 寺之下・尾原、同第179集 金田第2号古墳、同第180集 宮田2号遺跡、同第181集 中屋遺跡B地点、同第182集 国営備北丘陵公園整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書、同第183集 門田A遺跡・東槇木山第1・4号古墳、同第184集 駅家加茂地区内陸型複合団地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書、同第185集 廿日市町屋跡、同第186集 和田原D地点遺跡、同第187集 城遺跡、年報14、研究輯録Ⅸ、冠遺跡群Ⅵ

(財)広島市文化財団

(財)広島市文化財団発掘調査報告書第1集 広島城外堀跡・紙屋町・大手町地点、同第2集 塔の岡古墳群、同第3集 広島城遺跡基町高校グラウンド地点、第21回 匠の考古学、ガラスの勾玉づくり

(財)東広島市教育文化振興事業団文化財センター

文化財センター調査報告書第14冊 吹越遺跡、同第16冊 午王曾原遺跡、同第20冊 吹越遺跡Ⅱ、同第21冊 史跡安芸国分寺跡、旧石井家住宅移築修理工事報告書

(財)徳島県埋蔵文化財センター

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第14集 名東遺跡、同第20集 新蔵町1丁目遺跡、同第21集 庄遺跡Ⅱ、同第24集 庄遺跡Ⅲ、徳島県埋蔵文化財センター調査概報第2集 観音寺木簡

(財)香川県埋蔵文化財調査センター

年報平成10年度、国道バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度、四国横断自

- 動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 同、
 県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 同、都市計
 画道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 同、
 高松北警察署建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概
 報 同、香川県警察本部機動隊舎建設に伴う埋
 蔵文化財発掘調査概報 同、県営住宅建設に伴
 う埋蔵文化財発掘調査概報 同、研究紀要Ⅶ、
 讃岐Ⅱ
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター
 埋蔵文化財発掘調査報告書第76集 旭方1遺
 跡・旭方1号箱式石棺他、同第77集 上井遺跡、
 同第78集 鹿の子古墳群・新谷森ノ前遺跡、同
 第79集 馬島亀ヶ浦遺跡・馬島ハゼヶ浦遺跡
小郡市埋蔵文化財調査センター
 寺福童内畑下通東遺跡 小郡市文化財調査報告
 書第120集、埋蔵文化財調査報告書3 同第121
 集、井上廃寺Ⅰ 同第122集、大崎中ノ前遺跡2
 同第123集、勝負坂遺跡M地点 同第124集、三
 沢権通2遺跡 同第125集、力武前畑遺跡 同第
 126集、大板井遺跡Ⅱ 同第127集、小郡官衙
 周辺遺跡1 同第128集、小坂井ぐうてさん遺跡
 同第129集、大板井遺跡Ⅲ 同第130集
久留米市埋蔵文化財センター
 上津・藤光遺跡群、筑後国府跡第152次 久留
 米市文化財調査報告書第141集、筑後国府跡第
 155次 同第142集、二本木遺跡第14・15次 同
 第143集、一の左右遺跡・荒木今宮脇遺跡 同第
 144集、上津・藤光遺跡群 同第145集、野中前
 遺跡第2次 同第146集、白口経塚遺跡第4・
 5・6次 同第147集、山川南本村遺跡第1～4
 次 同第148集、筑後国府跡・国分寺跡 同第
 149集、平成10年度久留米市内遺跡群 同第150
 集、へボノ木遺跡第66次 同第151集、筑後国府
 跡第159次 同第152集
深川市教育委員会
 深川市文化財調査報告10 堺川左岸遺跡・北区
 1遺跡、同11 内大部川改修に伴う発掘調査
小樽市教育委員会
 蘭島遺跡・チブタシナイ遺跡 昭和62年度、同
 昭和63年度、蘭島餅屋沢遺跡、塩谷3遺跡 小
 樽市埋蔵文化財調査報告第3輯、蘭島遺跡C地
 点・餅屋沢2遺跡 同第4輯、チブタシナイ3
 遺跡 同第7輯、忍路5遺跡 同第11集、塩谷
 6遺跡 平成5年度小樽市埋蔵文化財調査概報、
 小樽市の歴史的建造物
上ノ国町教育委員会
 上之国勝山館跡ⅩⅩ、町内遺跡発掘調査事業概
 報Ⅱ
古川市教育委員会
 宮城県古川市文化財調査報告書第18集 小寺遺
 跡、同第19集 名生館官衙遺跡ⅩⅤ、同第20集
 鴻ノ巣館跡、同第21集 名生館官衙遺跡ⅩⅥ、
 同第25集 留沼遺跡
原町市教育委員会
 原町市埋蔵文化財調査報告書第18集 原町市内
 遺跡4
栃木県教育委員会
 栃木県埋蔵文化財調査報告第231集 栃木県埋
 蔵文化財保護行政年報21
万場町教育委員会
 奴郷2遺跡
群馬町教育委員会
 群馬町埋蔵文化財調査報告第52集 井出地区遺
 跡群、同第54集 町内遺跡Ⅶ
大宮市教育委員会
 大宮市文化財調査報告第46集 東北原遺跡、同
 第65集 上加遺跡・中野林袋遺跡・茗花遺跡・
 指扇下戸遺跡
志木市教育委員会
 志木市の文化財第27集 志木市遺跡群9
千葉市教育委員会
 埋蔵文化財調査報告書平成10年度、居寒台遺跡、
 荒勾遺跡
市原市教育委員会
 上総国府推定地歴史地理学的調査報告書、上総
 国分寺台遺跡調査報告Ⅴ、平成10年度市原市内
 遺跡発掘調査報告
木更津市教育委員会
 木更津市太田字宮の下遺跡、千束台遺跡群、大
 畑台遺跡群Ⅲ、笹子遺跡群Ⅰ、平成10年度木更
 津市内遺跡、木更津市文化財調査集報Ⅱ、木更
 津市史 富来田編
日の出町教育委員会
 三吉野遺跡群井戸端地区・阿岐野遺跡
鎌倉市教育委員会
 大仏切通周辺詳細分布調査報告書、鎌倉市埋蔵
 文化財緊急調査報告15 平成10年度発掘調査報
 告
茅ヶ崎市教育委員会
 上ノ町・広町遺跡、茅ヶ崎市埋蔵文化財調査報
 告第11集 西久保広町遺跡、同第12集 矢畑金
 山遺跡Ⅱ
三岳村教育委員会
 日向遺跡
吉田町教育委員会
 町史研究よしだ 第3号
中条町教育委員会
 中条町埋蔵文化財調査報告第16集 中倉遺跡3
 次、同第17集 町内遺跡Ⅴ、同第18集 下町・
 坊城遺跡Ⅲ、同第19集 大坪遺跡
魚津市教育委員会
 魚津市立博物館紀要第5号
井口村教育委員会
 蛇喰正覚寺遺跡
松任市教育委員会
 宮永ほじ川遺跡Ⅲ、北安田キタドウダ遺跡、横
 江荘遺跡、横江古屋敷遺跡
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
 平成10年度に福井県で発掘調査された遺跡の報
 告
美浜町教育委員会

興道寺遺跡、平成10年度興道廃寺範囲確認試掘調査報告書

大垣市教育委員会

大垣市埋蔵文化財調査報告書第7集 曾根城跡、大垣市文化財調査報告書第32集 大垣市埋蔵文化財調査概要、同第33集 昼飯大塚古墳Ⅳ

美濃市教育委員会

美濃市文化財調査報告第11号 中屋敷遺跡

神岡町教育委員会

神岡町埋蔵文化財調査報告第5集 江馬氏城館跡Ⅳ

袋井市教育委員会

石ノ形古墳、はるおか遺跡群、坂尻遺跡

菊川町教育委員会

菊川町埋蔵文化財報告書第54集 藤谷横穴群C群、同第55集 林光寺遺跡、同第56集 西袋遺跡、横地城跡

稲沢市教育委員会

稲沢市内遺跡発掘調査報告書Ⅴ

上野市教育委員会

上野市文化財調査報告51 城之越遺跡、同52 堂垣内・大多田遺跡、同63 上野城下町遺跡、同64 昭和63年度三反田遺跡、上野市埋蔵文化財年報5

草津市教育委員会

草津市文化財調査報告書第31集 草津宿本陣保存整備工事報告書、同第34集 柳遺跡

愛東町教育委員会

愛東町文化財調査報告書第7集 愛東町内遺跡Ⅳ、同第8集 百済寺生活環境保全林事業調査報告書

大阪市教育委員会

大阪の歴史と文化財第3号、平成9年度 大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

豊中市教育委員会

とよなか文化財ブックレットNo. 7 通史編Ⅶ、豊中市埋蔵文化財年報VOL. 5、同VOL. 6、豊中市文化財調査報告書第45集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要平成10年度

八尾市教育委員会

八尾市文化財調査報告140 八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ、同41 八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅱ、八尾市文化財紀要9 心合寺山古墳第6次、八尾市の文化財市指定文化財その1、同その2

高石市教育委員会

大園遺跡他の発掘調査概要

柏原市教育委員会

柏原市文化財概報1998-I 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報1998年度、同1998-II 大県南遺跡、同1998-III 田辺遺跡、同1998-IV 本郷遺跡、同1998-V 北峯古墳群・田辺遺跡、同1998-VI 柏原市遺跡群発掘調査概報1998年度、古代たたらとカヌチ

和泉市教育委員会

和泉市埋蔵文化財調査報告第5集 KM302窯

発掘調査報告書、和泉市埋蔵文化財調査発掘調査概報9、和泉市の歴史 考古学の世界

岸和田市教育委員会

岸和田市文化財調査概要24 平成10年度発掘調査概要、同25 久米田貝吹山古墳、岸和田市埋蔵文化財発掘調査報告書6 田治米宮内遺跡

河内長野市教育委員会

河内長野市文化財調査報告書第30輯 河内長野市埋蔵文化財調査報告書XⅤ

東大阪市教育委員会

東大阪市下水道事業関連発掘調査概要報告1998年度

阪南市教育委員会

阪南市埋蔵文化財発掘調査概要XⅣ、縄文と向出遺跡

大阪狭山市教育委員会

大阪狭山市文化財報告書17 狭山藩陣屋跡、同18 大阪狭山市遺跡群9

枚方市教育委員会

枚方市埋蔵文化財発掘調査概要1998

熊取町教育委員会

熊取町埋蔵文化財調査報告第31集 東円寺跡X、同第32集 熊取町遺跡群XⅢ

神戸市教育委員会

平成8年度神戸市埋蔵文化財年報、白水遺跡第4次、北青木遺跡、地下に眠る神戸の歴史展XⅠ、縄文人と弥生人

三田市教育委員会

三田文化財情報 平成10年度合冊

龍野市教育委員会

龍野市文化財調査報告21 長尾・小畑遺跡群、同22 竹原遺跡

姫路市教育委員会

TUBOHORI 平成6年度、同平成9年度

加美町教育委員会

加美町文化財報告3 奥豊部1号墳

中町教育委員会

中町文化財報告18-1 円満寺東の谷遺跡

八鹿町教育委員会

山名第5号、城第171号

東浦町教育委員会

東浦町埋蔵文化財調査報告第2集 引野遺跡発掘調査概要

橿原市教育委員会

橿原市埋蔵文化財発掘調査概報平成10年度

天理市教育委員会

天理市埋蔵文化財調査概報 平成6・7年度、天理市埋蔵文化財調査報告第6集 狐ヶ尾8号・9号墳

安来市教育委員会

安来の文化財、高畑遺跡詳細分布調査報告書、小久白遺跡詳細分布調査報告書、古市遺跡、教皇寺二、安来市造山古墳群、大成古墳第3次、県道米子伯太線に伴う試掘調査報告書、清水大日堂裏古墓、安来市埋蔵文化財調査報告書第26集 小馬木古墳群、同第27集 荒島古墳群、同

- 第28集 小汐手遺跡、同第29集 清瀬地区発掘調査報告書
- 出雲市教育委員会**
西谷15・16号墓、藤ヶ森南遺跡、小山遺跡、高浜Ⅱ遺跡、天神遺跡第9次、古志本郷遺跡、出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書 第9集
- 岡山市教育委員会**
長坂古墳群発掘調査報告、宗形神社古墳、岡山市埋蔵文化財調査の概要1997(平成9)年度
- 久世町教育委員会**
久世町埋蔵文化財発掘調査報告3 羽庭城
- 広島県教育委員会**
中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告9 史跡吉川氏城館跡
- 庄原市教育委員会**
庄原市文化財調査報告書第5集 尾崎遺跡・田元沖古墓
- 山口市教育委員会**
山口市埋蔵文化財調査報告第71集 山口市内遺跡詳細分布調査
- 下関市教育委員会**
下関市埋蔵文化財調査報告書68 田中遺跡
- 阿東町教育委員会**
阿東町埋蔵文化財調査報告第2集 常德寺庭園
- 高松市教育委員会**
高松市埋蔵文化財調査報告第40集 奥の坊遺跡群、同第41集 高松城跡、同第42集 史跡高松城跡
- 寒川町教育委員会**
極楽寺墳墓群
- 土佐市教育委員会**
人麻呂様城跡 土佐市埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
- 福岡県教育委員会**
大宰府史跡 平成10年度発掘調査概報、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告53~56、貝元遺跡Ⅱ、以来尺遺跡Ⅲ、鷹取五反田遺跡Ⅱ、船越二ノ上遺跡、堀池口ヶ坪遺跡、百留居屋敷遺跡、上唐原了清遺跡、福岡県文化財調査報告書第137集 天生田大池遺跡、同第138集 久泉遺跡、同第139集 新代広ミ遺跡、同第140集 大鎧遺跡・倉谷古墳群、同第141集 野添遺跡、同第142集 芦屋町山鹿地区芦屋層群漸新世化石群調査報告、同第143集 伊良原、福岡県埋蔵文化財発掘調査年報平成8年度
- 前原市教育委員会**
伊都国発歴史の謎解き
- 筑後市教育委員会**
筑後市文化財調査報告書第19集 徳久中牟田遺跡、同第20集 筑後市内遺跡群、同第21集 筑後西部第2地区遺跡群、同第22集 前津中ノ玉遺跡Ⅱ、同第23集 長崎坊田遺跡
- 豊前市教育委員会**
豊前市文化財調査報告第9集 今市向野遺跡C地点、同第10集 今市向野遺跡A・B地点、同第12集 青畑向原遺跡・永久遺跡
- 行橋市教育委員会**
行橋市文化財調査報告書第26集 御所ヶ谷神籠石、同第27集 鬼熊遺跡
- 八女市教育委員会**
八女市文化財調査報告書第54集 惣津町遺跡、同第55集 万上田遺跡、同第56集 八女東部地区埋蔵文化財発掘調査概報5、同第57集 埋蔵文化財調査概報Ⅰ
- 津屋崎町教育委員会**
津屋崎町文化財調査報告書第15集 練原遺跡
- 志免町教育委員会**
志免町文化財調査報告書第8集 横枕遺跡、同第9集 志免町内遺跡等詳細分布調査報告書
- 水巻町教育委員会**
御輪地遺跡・杵遺跡箱式石棺 水巻町文化財調査報告書第7集
- 志摩町教育委員会**
久米遺跡 志摩町文化財調査報告書第21集
- 鎮西町教育委員会**
鎮西町文化財調査報告書第18集 平野町遺跡
- 菊水町教育委員会**
松坂古墳
- 竜北町教育委員会**
竜北町文化財調査報告第1集 野津古墳群Ⅱ
- 大分県教育委員会**
大分県文化財調査報告書第101輯 堂ノ間遺跡、同第102輯 龍頭遺跡、同第103輯 スポーツ公園内遺跡群、同第104輯 古国府遺跡群、九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10~14 夕田遺跡群、ナシカ谷遺跡、瀧ノ原遺跡、中尾近世墓地、府内城下町遺跡、大分県埋蔵文化財年報7
- 竹田市教育委員会**
平成4年度岡藩銭座跡、岡藩城下町遺跡群・竹田地区南部遺跡群Ⅴ、竹田地区南部遺跡群Ⅶ・史跡岡城跡周辺遺跡群Ⅱ、竹田地区南部遺跡群・史跡岡城跡周辺遺跡群Ⅲ、城下町遺跡群Ⅱ、戸上遺跡・穴井迫第2遺跡、穴井迫第2遺跡・穴井迫第3遺跡、一般国道57号埋蔵文化財発掘調査概報、四山社製糸工場跡、城下町遺跡立花屋敷、中川午之助屋敷群・稲崎谷近世墓地群、中川午之助屋敷群・野殿家屋敷跡、史跡岡城跡ⅩⅠ、史跡岡城跡ⅩⅡ、史跡岡城跡ⅩⅢ、史跡岡城跡ⅩⅣ(官路埋設)、史跡岡城跡ⅩⅤ
- 久住町教育委員会**
久住町文化財調査報告書6 板切遺跡群
- 三重町教育委員会**
三重地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ、同Ⅲ、三重町文化財調査報告書第5集 牟礼越遺跡
- 玖珠町教育委員会**
玖珠町文化財調査報告書第9集 陣ヶ台遺跡
- 宮崎市教育委員会**
宮崎市文化財調査報告書第36集 熊野第2遺跡、同第37集 松添貝塚Ⅱ、同第38集 北中遺跡、同第39集 東宮遺跡、同第40集 石ノ迫第2遺跡、同第41集 下郷遺跡

都城市教育委員会

都城市文化財調査報告書第47集 肱穴遺跡

田野町教育委員会

田野町文化財調査報告書第29集 ズクノ山第2遺跡、同第30集 前ノ原第2遺跡・ズクノ山第2遺跡E地区、同第31集 畑田遺跡、同第32集 本野遺跡

高城町教育委員会

高城町文化財調査報告書第7集 町内遺跡詳細分布調査報告書、同第8集 上別府遺跡・下野遺跡

高千穂町教育委員会

高千穂町文化財調査報告書第11集 宮ノ前第2遺跡・今狩平横穴墓群第2号横穴墓

余市水産博物館

入舟遺跡における考古学的調査

沙流川歴史館

平取町文化財調査報告書11 平取桜井遺跡、同12 旧平取小学校植物園遺跡

北上市立博物館

研究報告第12号

(社)日本金属学会附属金属博物館

紀要第31号

秋田県立博物館

年報平成11年度、研究報告第24号、おもちゃ

群馬県立歴史博物館

紀要第20号

国立歴史民俗博物館

研究報告第77集

千葉県立中央博物館

人文科学第6巻第1号

千葉県立房総風土記の丘

年報21

市立市川考古博物館

年報第24～26号、研究紀要第1、2号、市立市川考古博物館研究調査報告第7冊 向台貝塚資料図譜

芝山古墳・はにわ博物館

山武郡の古墳

大田区立郷土博物館

紀要第9号、復刻版 博物館ノートNo.50～100

府中市郷土の森

紀要第12号、年報第11、12号

平塚市博物館

博物館ガイド、年報第22号、自然と文化第22号

茅ヶ崎市文化資料館

調査研究報告7

小田原市郷土文化館

研究報告No.35

松本市立考古博物館

松本市文化財調査報告No.135 出川西遺跡VI、同No.136 高宮遺跡II、同No.137 兎川寺遺跡、同No.139 出川南遺跡V、同No.140 旧射的場西遺跡III、同No.141 旧射的場西遺跡IV、信濃浅間古墳

長岡市立科学博物館

NKHNo.75、研究報告第34号

豊栄市博物館

葛塚遺跡発掘調査報告

石川県立歴史博物館

うさぎワンダーランド

沼津市歴史民俗資料館

紀要23

名古屋市博物館

研究紀要第22巻

豊橋市美術博物館

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第50集 吉田城址III、同第51集 橋良遺跡II、平成10年度三ツ山古墳調査概要I

斎宮歴史博物館

斎宮歴史博物館研究紀要三、同八、幻の宮 伊勢斎宮

鈴鹿市考古博物館

鈴鹿市埋蔵文化財調査年報V

滋賀県立安土城考古博物館

寧慮に違わず、平成10年度年報、紀要第7号、あっ！この遺跡知ってる！

大阪府立近つ飛鳥博物館

館報4、百舌鳥・古市 門前

八尾市立歴史民俗資料館

研究紀要第10号

柏原市立歴史資料館

館報10、かわらの相撲碑

吹田市立博物館

七尾瓦窯跡、高城B遺跡、目俵遺跡、平成10年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報

太子町立竹内街道歴史資料館

館報第5号

往生院六萬寺歴史館

夕日のかなたに見た浄土、岩瀧山往生院六萬寺史 上巻

西宮市立郷土資料館

収蔵資料目録第二集

西脇市郷土資料館

西脇市の指定文化財

播磨町郷土資料館

播磨町文化財調査報告書第6集 播磨大中遺跡、館報平成10年度

新市町立歴史民俗資料館

信岡家文書I、新市町文化財調査報告第8集 汐首・後池、同第10集 城山C遺跡

山口県立山口博物館

研究報告第25号

下関市立考古博物館

研究紀要第3号、年報4

田川市石炭資料館

田川市文化財調査報告書第9集 経塚横穴群・古墳群

鹿児島市立ふるさと考古歴史館

鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書24 若宮遺跡、同25 不動寺遺跡

- ミュージアム知覧
館報第5号
国立慶州博物館
慶州千軍洞避幕遺蹟
国立大邱博物館
国立大邱博物館學術調査報告第3冊 大邱斗山
洞古墳発掘調査報告書
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター
年報11、同12
筑波大学歴史・人類学系
先史学・考古学研究第10号、歴史人類第27号
立正大学熊谷校地遺跡調査室
年報X
千葉大学文学部考古学研究室
大寺山洞穴第6次、同第7次
東京大学埋蔵文化財調査室
東京大学構内遺跡調査研究年報2、同別冊
早稲田大学考古学会
古代第106号
青山学院大学文学部史学研究室
上野原遺跡発掘調査報告書
創価大学
森北古墳群
東洋大学文学部史学科研究室
白山史学第35号、紀要第52集
國學院大學考古学資料館
紀要第15輯
明治大学博物館事務局
研究報告第4号、図書目録第1号
東海大学構内遺跡調査団
王子ノ台遺跡第Ⅱ巻
名古屋大学文学部考古学研究室
史学45[考古学抜刷第14集]、考古資料ソフト
ックス写真集第14集
滋賀県立大学人間文化学部
人間文化5・6号
総合研究大学院大学
人文科学とコンピュータ・イメージ処理、1998
年度人文科学とコンピュータ・テキスト処理
大阪大学文学部考古学研究室
国家形成期の考古学、古墳時代首長系譜変動パ
ターンの比較研究
奈良女子大学
奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅵ
島根大学埋蔵文化財調査研究センター
島根大学埋蔵文化財調査研究報告第3冊 島根
大学構内遺跡第6・7次調査、同第4冊 島根
大学構内遺跡第5・9次調査
岡山理科大学図書館
自然科学研究所研究報告第24号
徳島文理大学文学部文化財学科
弁天島古墳群調査概要報告
熊本大学埋蔵文化財調査室
年報5
釜慶大學校博物館
- 釜慶大學校博物館研究叢書第4輯 山清沙月里
環濠遺蹟
慶南大學校博物館
蔚山無去洞玉岷遺蹟
- 日本窯業史研究所
日本窯業史研究所報告第48冊 赤田地区遺跡群
集落編Ⅱ、同第49冊 馬場3丁目横穴墓群、同
第52冊 折本遺跡、同第53冊 藤林遺跡、町屋
遺跡調査概報Ⅰ
山武考古学研究所
出版物目録、年報No.17
東邦考古学研究会
東邦考古第23号
台東区文化財調査会
上野忍岡遺跡群 台東区埋蔵文化財発掘調査報
告書第5集、浅草寺西遺跡 同第6集、茅町遺
跡 同第7集、上野忍岡遺跡群 同第8集
十条久保遺跡調査会
十条久保遺跡
飛鳥山遺跡調査団
飛鳥山遺跡Ⅱ
足立区伊興遺跡調査会事務局
毛長川流域の考古学的調査、伊興遺跡Ⅱ
都営川越道住宅遺跡調査会
武蔵台東遺跡Ⅰ～Ⅲ
府中市埋蔵文化財整理事務所
府中市埋蔵文化財調査報告第16集 武蔵国府関
連遺跡調査報告16、大量出土銭発掘の記録
府中病院内遺跡調査会
府中病院道路拡張に伴う調査報告書、武蔵台遺
跡Ⅳ
日本考古学協会
日本考古学年報50、日本考古学第6、7号
(株)ニュー・サイエンス社
考古学ジャーナル3月号 No.442
(株)山川出版社
はにわ人は語る
国立国会図書館
日本全国書誌 通号2227、2230、2235号
(財)松ヶ岡文庫
研究年報第13号
武相文化財研究所
愛名宮地遺跡
玉川文化財研究所
宮山遺跡、県営三ヶ木団地内遺跡、川尻遺跡、
藤沢市No.322遺跡、稻荷久保遺跡、幸区No.7遺
跡
鎌倉考古学研究所
保寧寺跡、若大路周辺遺跡群
(有)吾妻考古学研究所
三荷座前遺跡第1地点、三荷座前遺跡第2地点、
薬師院裏遺跡、長尾台北遺跡、黒川地区遺跡群
報告書Ⅷ
木曾広域連合事務局
日向遺跡

奥三面遺跡調査室

奥三面遺跡群

埋蔵文化財整理事務所

梶子遺跡、梶子北遺跡、山ノ花遺跡、大山本村遺跡、東野宮遺跡B、東野宮遺跡A

ニッポングラフ新聞社

月刊上下水道 5月号

(財)古代学協会

古代文化 第51巻第4～6号

(財)世界人権問題研究センター

人権 ゆかりの地をたずねてⅢ、同乙訓・南山城編

(株)フルハウス

道をたんねて二千年

姫路市立城郭研究室

年報第8号、播磨極楽寺瓦経

尼崎市立文化財収蔵庫

尼崎市埋蔵文化財調査年報平成6年度、尼崎市文化財調査報告第27集 尼崎市内遺跡復旧・復興事業に伴う発掘調査、同第28集 猪名庄遺跡

阪神文化財調査会

東畑・南浦遺跡発掘調査報告書

妙見山麓遺跡調査会

大伏古窯分布調査報告書

(財)黒川古文化研究所

貨幣

株式会社 埋文

大開遺跡発掘調査報告書、淡河萩原遺跡

奈良国立文化財研究所

奈良国立文化財研究所史料第47冊 北魏洛陽永寧寺

奈良県立橿原考古学研究所

出土木製品の保存科学的研究

シルクロード学研究所

隊商都市パルミラの東南墓地の調査と研究、正倉院宝物名英訳辞典

埋蔵文化財天理教調査団

考古学調査研究中間報告20 布留遺跡守日堂地区・守日堂地区発掘調査報告書

朝鮮学会

朝鮮学報 第171輯

島根県古代文化センター

しまねの古代文化第6号、古代文化叢書5、古代文化研究第7号

津山弥生の里文化財センター

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第64集 荒神峪遺跡、同第65集 有元遺跡・男戸嶋遺跡、津山弥生の里第6号

福岡町文化財事務所

福岡割畑遺跡 福岡町文化財調査報告書第14集、手光古墳群Ⅱ 同第15集

博物館等建設推進九州会議・編集委員会

Museum Kyushu 季刊第16巻・第4号、同第17巻・第1号

(財)京都市埋蔵文化財研究所

平成9年度京都市埋蔵文化財調査概要、研究紀要第5号

京都市埋蔵文化財調査センター

京都市内遺跡発掘調査概報 平成10年度、京都市内遺跡試掘調査概報 同、京都市内遺跡立会調査概報 同

(財)向日市埋蔵文化財センター

向日市埋蔵文化財調査報告書第47集、同第49集

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

年報平成9年度

京都府教育委員会

埋蔵文化財発掘調査概報(1999)、京都の文化財第16集、重要文化財仁和寺飛壽亭並びに国宝金堂・重要文化財遼廓亭・御影堂中門修理工事報告書、重要文化財妙心寺庫裏ほか5棟修理工事報告書

丹後町教育委員会

平成10年度町内遺跡発掘調査概報

弥栄町教育委員会

弥栄町文化財調査報告第15集 大田南古墳群／大田南遺跡／矢田城跡

大宮町教育委員会

大宮町文化財調査報告書第14集 三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群他、同第15集 新宮遺跡発掘調査概報、同第16集、同第17集 大宮町遺跡地図

岩滝町教育委員会

大風呂南墳墓群発掘調査概報

大江町教育委員会

大江町文化財調査報告書 第6集、同第7集 大江町遺跡地図

城陽市教育委員会

城陽市埋蔵文化財調査報告書 第36集、同第37集

京田辺市教育委員会

新田遺跡第4次発掘調査概報 京田辺市埋蔵文化財調査報告書第29集

宇治田原町教育委員会

宇治田原町埋蔵文化財調査報告書第1集 宇治田原町遺跡地図・町内遺跡詳細分布調査報告書

京都府立総合資料館

資料館紀要第27号

京都市歴史資料館

京都市の文化財第11回

京都市考古資料館

続・洛中桃山陶器の世界

綾部市資料館

綾部市文化財調査報告第27集、館報平成9年度、DUST BOX

園部文化博物館

文字

亀岡市文化資料館

探求!丹波亀山城、館報第6号

同志社大学考古学研究室

同志社大学文学部考古学調査報告第10冊 加茂谷川岩陰遺跡群、同志社大学考古学シリーズⅦ

口丹波史談会

丹波史談 平成10-特

精華町の自然と歴史を学ぶ会

波布理曾能第16号

梶 国男

多摩考古第29号

小林義孝

よみがえる弥生の都市と神殿

寺沢 薫

最新邪馬台国事情

西田 弘

近江の古代氏族

西中川駿

古代遺跡出土骨からみたわが国のイノシシとブタの起源ならびに飼育に関する研究

水野和雄

敦賀市立博物館紀要第14号、安濃町埋蔵文化財発掘調査報告5 大城遺跡発掘調査報告書

森島康雄

中世土器研究 合冊(81~90号)

森山一止

和鉄・鑪製鉄関連図書論文リスト

編集後記

情報73号が完成しましたので、お届けします。

日増しに秋めいてまいりました。

今回は、古代道路の特集として、かつて内里八丁遺跡で検出され、話題をまいた古山陰道と、乙訓地域の百々遺跡の調査成果によって判明した西国街道の成立に関する論考を掲載いたしました。また、平安京右京一条三坊九・十町の調査の概要と資料紹介も併せて掲載しました。

本号編集中の折り、当調査研究センターの足利健亮理事のご逝去の報に接しました。ご冥福をお祈りいたします。

(編集担当=河野一隆)

京都府埋蔵文化財情報 第73号

平成11年 9月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代) Fax (075)922-1189 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代) Fax (075)441-3159 (代)



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER